

造山第4号古墳

1998年3月

岡山市教育委員会



造山古墳群全景

造山第4号古墳

序

岡山市は市域に原始・古代における「クニ」のひとつである「吉備」の中核を内包しており、古墳をはじめとする数多くの文化財が存在しております。岡山市教育委員会では文化的環境の整備、充実の一環として、文化財の保護、活用に取り組んでおります。これらの文化財は岡山市やそこに住む我々市民の歴史的基盤をなすかけがえのない財産であり、我々の祖先の生きた証しそのものであります。私共はこの貴重な文化遺産を保護し、永く子々孫々に伝え残すために、一層の努力を惜しまない所存であります。しかしながら、急速な都市化の中、増加・大型化を続ける開発はこれら文化財にとりましては危機的状況を招来させており、広く市民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を頂かなければ果たせないことを理解しております。

この度報告いたします造山古墳第四古墳は全国第4位の規模を誇る造山古墳に隣接する中規模の古墳であり、地域の歴史はもとより古墳時代を知る上で非常に貴重な古墳であります。造山古墳第四古墳に關しましては、主墳である造山古墳とともに国史跡の指定を受けており、文化財としての整備・活用を含めた保存が求められる古墳であります。この度の調査は応急対応的なものでもあり、必ずしも十分な調査が実施できたとは言い難い面もありますが、限られた条件の中で最大限の成果を上げることができたと信じております。この成果が岡山地域の歴史、古墳時代史の研究に寄与すると同時に今後の保存・整備に活用されることを心から願っております。

最後になりましたが、調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、ならびに関係機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成10年3月31日

岡山市教育委員会
教育長 戸村彰孝

例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課が平成3年5月15日から5月24日にかけて実施した市道新庄下49号外2線の拡幅に伴う畠地削平および擁壁の構築に伴って岡山市新庄下1189-2において発見された、造山第4号古墳付属施設の試掘調査の報告書である。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、執筆は安川満が担当した。
3. 遺物の実測、トレース、遺物の写真撮影、編集は安川が行った。
4. この報告書において用いている高度値は標準海拔高度を基本とするが、調査時は工事の「道路改良工事平面図」に記載された高度値に従った。しかしその後、この値が海拔高度と大きくずれることが判明したため、岡山市発行の2,500分の1岡山市域図14-1、岡山市教育委員会・岡山県発行500分の1「造山古墳群」と比較の上、補正した値を使用している。なお、工事平面図の高度値は第4号古墳西側の畠地面で『市域図』、「造山古墳群」の高度値よりおよそ4.4m高くなっている。
5. この報告書において用いている方位は磁北である。
6. この報告書においては古墳時代の時期区分は特に断らない限り10期編年（広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国）に、円筒埴輪の編年は川西宏幸の円筒埴輪編年（川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2）に従うものとする。なお、これらの相対年代に対する実年代は、10期編年V期を5世紀前葉、VI期を5世紀中葉、VII期を5世紀後葉としておく。
7. 第2図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「総社東部」「倉敷」を、第3図は岡山市発行の2,500分の1岡山市域図14-1を複製、加筆したものである。また第4図、第5図は岡山市教育委員会・岡山県「造山古墳群」を一部改変したものである。
8. この報告書で報告した遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会で保管している。

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
1) 造山第4号古墳の位置と研究の現状	1
2) 地理的環境	5
a. 周辺の地形・地質	
b. 周辺の景観	
c. 造山古墳群付近の地形と景観	
3) 歴史的環境と周辺の遺跡	8
a. 歴史的環境	
b. 周辺の遺跡	
第Ⅱ章 調査の経過と概要	12
1) 調査の契機と経過	12
2) 調査の概要	15
第Ⅲ章 遺構と遺物	17
1) 検出遺構	17
a. 造出し状遺構	
b. 周溝状遺構	
c. まとめ	
2) 出土遺物	22
a. 朝顔形埴輪・円筒埴輪	
b. 形象埴輪	
c. 胎土・焼成の特徴	
d. まとめ	
第Ⅳ章 調査の成果と展望	43
1) 造山第4号古墳の墳形について	43
a. 造山第4号古墳墳丘の復元	
b. 復元案の問題点	
2) 造山古墳群と造山第4号古墳	46
a. 造山第4号古墳の立地と造山古墳群	
b. 帆立貝形前方後円墳の階層性と規格性	
c. 造山古墳群とその評価	

挿図目次

第1図 造山第4号古墳の位置	
第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)	7
第3図 調査区の位置 (S = 1/5,000)	13
第4図 調査区の位置 (S = 1/500)	14
第5図 造山第3号古墳隣接地トレンチ位置図 (S = 1/500)	16
第6図 造山第3号古墳隣接地トレンチ柱状図 (S = 1/20)	16
第7図 検出遺構平面図 (S = 1/100)	17
第8図 周溝状遺構土層断面図 (S = 1/40)	18
第9図 周溝状遺構遺物出土状況 (S = 1/20)	19
第10図 墓輪各部の呼称	23
第11図 出土地輪①(朝顔形) (S = 1/4)	24
第12図 出土地輪②(朝顔形・円筒) (S = 1/4)	25
第13図 出土地輪③(朝顔形・円筒) (S = 1/4)	26
第14図 出土地輪④(円筒・形象埴輪基部) (S = 1/4)	27
第15図 出土地輪⑤(短甲形・蓋形ほか)	28
第16図 出土地輪(家形埴輪) (S = 1/6)	31~33
第17図 造山古墳周辺の中期古墳編年の対比	37
第18図 造山第4号古墳墳丘復元 (S = 1/500)	43
第19図 造山第4号古墳墳丘の築造企画 (S = 1/500)	44
第20図 造山古墳群の地形(復元) (S = 1/3,000)	46
第21図 造山第4号古墳と千足古墳	49
第22図 千足古墳と県下の帆立貝形前方後円墳	50
第23図 造山第4号古墳と銭瓶塚古墳	51

表 目 次

表1 造山古墳群名称対照表	3
表2 出土地輪観察表(朝顔形・円筒ほか)	39~41
表3 出土地輪観察表(形象埴輪)	42
表4 県下の帆立貝形前方後円墳	47
表5 帆立貝形前方後円墳の後円部規模と階層性	48

図版目次

卷頭 造山古墳群全景

Fig. 1 造山第4号古墳全景（調査部分・工事完了後）

埴輪出土状況

朝顔形埴輪

Fig. 2 円筒埴輪(8)

円筒埴輪ほか

形象埴輪（蓋形ほか）

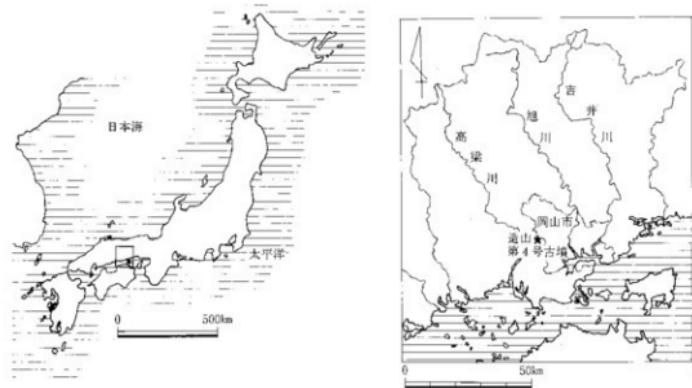
Fig. 3 短甲形埴輪（短甲部）

短甲形埴輪（草摺・基部）

Fig. 4 家形埴輪（正面）

家形埴輪（背面）

家形埴輪（屋根）



第1図 造山第4号古墳の位置

第Ⅰ章 位置と環境

1) 造山第4号古墳の位置と研究の現状

造山第4号古墳¹⁾は、県下最大、全国的にも第4位の規模を誇る造山古墳の陪塚群と言われる古墳群中の古墳である。造山古墳・造山古墳群は西を三須丘陵、東を黒住丘陵にはさまれた広い谷のほぼ中央に突き出した標高10~40mの低丘陵上に立地する。行政的には岡山市新庄下にあたり、律令制下には備中國都宇郡河面郷に属していた。周辺は最大級の古墳が密集する一大古墳群であり、丘陵や山麓には多数の横穴式石室墳が築かれている。なお、造山古墳・造山古墳群は1921年(大正10年)国指定史跡に指定されている。

この古墳群は造山古墳の前方部前端の堀切を挟んで南西側に位置し、現在6基の古墳が存在する。地元ではかつては「七つぐろ」と呼ばれていたという²⁾。1912年(明治45年)古墳群中の榎山古墳(第1号古墳)、千足古墳(第5号古墳)が発掘され、馬形帶鉤をはじめとする多量の遺物を出土、千足古墳では直弧紋の装飾をもつ石室が明らかになった。1913年(大正2年)官命により両古墳を調査に訪れた和田千吉の報告³⁾では古墳群中に7基の古墳が存在したようである。

1930年発行の『岡山縣通史』の永山卯三郎の記述⁴⁾では「大正八年以来の調査に係るもの」とし
加茂造山古墳 大字新庄下 前方後円式前方部に石棺あり

榎山 東丘 同 上 円丘高二一尺、直径一五六尺

同 西丘 同 上 今竹林方丘の如きは切落の結果 高一五尺、径九〇尺

同 中丘 同 上 今切落されて三角形となれり、復元せば径七〇尺高一五尺

同 坪丘 同 上 円丘高二一尺、径一四〇尺、丘下埴輪破片多し

同 南丘 同 上 全然崩されて平地となれり

千足下の古墳北 同 上 円丘高二一尺、径一九〇尺、石室存す

千足下墳、南丘 同 上 円丘高一八尺、直径一〇五尺、今果園となる

としており、規模や方角、現状から東丘が榎山古墳、西丘が第2号古墳、中丘が第3号古墳、坪丘が第4号古墳、南丘が現存しない1基にあたると思われる。

1936年(昭和11年)には梅原木治らによって調査され、円墳とされていた千足古墳が帆立貝形の前方後円墳であること、同墳石室の実測図が報告された⁵⁾。

戦後、西川宏による徹底した現地観察に基づく研究が特筆される。西川はこの古墳群を造山古墳被葬者の陪臣・陪從者の墓、すなわち陪塚であると評価し「原初的な官僚とでもいうべき層が結集したことの反映」と考えた⁶⁾。これに対し、春成秀爾は造山古墳の外帯の区画と第2号古墳の南辺西辺が一致するとし、少なくとも第2号古墳のみは陪塚としてよいとやや慎重なとらえかたをする⁷⁾。字垣匪雅は埴輪などの検討から、古墳群中の古墳にある程度の時期差を認めながらも陪塚として評価する⁸⁾。古墳群が陪塚群であるか否かは、主墳である造山古墳との築造時期の関係はもとより、主墳を含めた規格性の追及、周辺の他の諸古墳との対比、さらには「陪臣」自体の性格の追及が必要と考えられる。たしかに古墳群中の古墳は造山古墳に対し極めて近接した関係にありながらも、計画的な配置のもとに築造されているようには見えない。また、副葬品などの実態のある程度判明しているものが榎山古墳、千足古墳の2基

のみという現状では、その被葬者たちの性格を追及することはもとより、陪塚か否かを判断することは難しいというほかない。

それでは古墳群中の各古墳に関して概要を見ることとしよう。

造山古墳¹⁰は全長360m、後円部径224m、同高さ32.5m、前方部前端幅230m、前方部高さ27mを測る。岡山県最大、全国第4位の規模を誇る前方後円墳である。墳丘は三段築成でくびれ部の両側に造出しが付属する。各段には円筒埴輪列があり、割石の葺石を敷設している。後円部からは盾、蓋、鞆、家の形象埴輪が採集されている。円筒埴輪は外面の二次調整は簾状痕のあるB種ヨコハケのものが多く、大半が黒斑のある土師質のものだが、窯窯焼成のものも含まれているようである。前方部には阿蘇凝灰岩製¹¹の削り抜き式の長持形石棺（舟形石棺）がある。この蓋には妻部分に直弧紋¹²が描かれており、熊本県鴨籠古墳の石棺との類似が指摘されている¹³。この石棺は前方部に建つ神社社殿前から出土したと言われる¹⁴。築成時期に関しては、葛原克人は窯窯焼成の埴輪は副次的なものとし、5世紀第1四半期とする¹⁵。それに対し、春成秀爾は窯窯焼成の埴輪の存在を重視し430～440年前後とする¹⁶。また松木武彦は造山古墳出土の蓋形埴輪の特徴は5世紀前葉の終わりごろから中葉のものと指摘している¹⁷。

榎山古墳（第1号古墳）¹⁸は造山古墳前方部前端の堀切を挟んだ正面に位置し、現状では径約35m、高さ約6.5m、二段築成の円墳状を呈する。墳頂部と墳丘裾には円筒埴輪列が巡る。帆立貝形前方後円墳といわれるが、前方部（造出）の位置に関しては西北西側、南西側、南東側など諸説ある¹⁹。1912年の発掘でコウヤマキ製の割竹形木棺が出土、変形三神三獸鏡、馬形帶鉤、碧玉製卵形品、銅鈴、刀劍、槍、斧など多数の遺物が発見された。これらの遺物は、同時期に発掘された千足古墳の出土品と混在・混乱しているとの説もある²⁰。また、墳丘南西側からは伽耶系の陶質土器、須恵器が発見されている²¹。

第2号古墳は榎山古墳の北西約100mに位置する、一辺約21m、高さ4mの方墳状の古墳である。永山卯三郎の記述によれば第2号古墳が方墳を呈するのは周囲を削られたためであり、もとは円墳であったという²²。しかし、第2号古墳の周囲は北側～北西側に同じ幅の方形の水田区画が取り巻いているとともにともと方墳であったと考えて良いと思われる。また、先述のとおり春成秀爾は第2号古墳の南辺西辺が造山古墳外帯の区画に一致するとし、造山古墳と同時に企画、設計されたものとしている²³。造山古墳の外帯の存在はともあれ、第2号古墳東側の丘陵裾は造山古墳前方部の延長線で切られたようになっており、第2号古墳の東辺西辺がこの延長線とほぼ平行することからも、第2号古墳が造山古墳の企画と密接な関係をもって築造されている可能性は高いものと思われる。

第3号古墳は第4号古墳の北西約50mに位置する。周囲を大幅に削平され墳形、規模などを復元することは困難だが、残丘や周囲の水田区画から径30m程度の円墳と考えられる。なお、消滅した榎山南丘はこの第3号古墳と第4号古墳の南西付近の丘陵端部にあったものと思われる²⁴。

第4号古墳は榎山古墳の南西約120mの位置にある。現状では径約35m、高さ5.5m程度の円墳状を呈しており、かつては円筒埴輪列が存在したという²⁵が、現在は確認することができない。

千足古墳（第5号古墳）²⁶は第4号古墳の南東約150mに位置する帆立貝形前方後円墳。全長約74m、後円部径約54m、同高約6.8mを測る。後円部のほぼ中央に横穴式石室の玄室が開口している。これは1912年の発掘で開口したもので、その上部には粘土櫛が存在したという。玄室は長さ3.45m、幅2.5m、高さ2.7m、板石を小口積みにした持ち送りの強い石室で、赤色顔料が塗布されていた。玄室奥を切石で区画して棺床を作りつけ、その前面の障壁には上面に縫手紋、前面に直弧紋が彫刻されている。棺床上から半円方形帶変形五獸鏡、碧玉製勾玉、障壁と石室側壁との間から鐵鎌が、石室上方の粘土櫛から変形五獸鏡、巴形銅器、玉類、刀劍、斧、甲冑が出土した。

第6号古墳は千足古墳の南約100mの位置にある。現状は径約30m、高さ約5mの円墳である。

また、造山古墳の北西300m付近に新庄車塚古墳がかつて存在しており、径約70mの円墳あるいは全長120m程度の前方後圓墳であったと言われる。永山卯三郎によると付近に三吉塚址、車塚址の2基の削平された古墳を挙げており、車塚址がこれにあたると思われる。削平の際出土したと伝えられる圓筒埴輪が知られている。また、三吉塚址に関しては「もと前方後圓式なりしを破却して水田とす」とされているが、和田千吉の報告中には見えず、現況でも全く不明である。

周囲、特に第4号古墳から北西方面は大正年間の耕地整理によりかなり地形が改変されている。この耕地整理は和田千吉、永山卯三郎の記述から1913年（大正2年）から1919年（大正8年）の間に行われたと考えられる。柳山南丘の削平、柳山西丘（造山第2号古墳）、柳山中丘（造山第3号古墳）の「切落」などもこの際になされたものであろう。また車塚址の記述では「維新の頃之を拓き大正三年之を水田とす」としており、この1914年（大正3年）のものも一連の耕地整理であった可能性が大きい。一方、西川宏によると1921年（大正10年）に造山の北・西側の湿田に対する大規模な耕地整理が行われ、この際車塚古墳が削平されたとしている。

註

- (1) 史跡指定名称としては正しくは「造山古墳付第四古墳」であるが、ここでは「造山第4号古墳」と呼称する。なお、「岡山市埋蔵文化財分布地図」（岡山市教育委員会 1983）では造山古墳群中の古墳の名称が間違っている。ここで対照表をあげ訂正しておきたい。

表1 造山古墳群名称対照表

史跡指定名称	『岡山市埋蔵文化財分布地図』		永山卯三郎(1930)
	番号	名称	
第一古墳（柳山古墳）	40-111	付 1 号 墳	柳山東丘
第二古墳	-112	付 2 号 墳	柳山西丘
第三古墳	-114	付 4 号 墳	柳山中丘
第四古墳	-113	付 3号墳（柳山古墳）	柳山坤丘
第五古墳（千足古墳）	-115	付 5号墳（千足古墳）	千足下の古墳南
第六古墳	-116	付 6 号 墳	千足下墳、南丘
—	—	—	柳山南丘

- (2) 「ぐろ」とは稲藁などを積み上げた塚状のものをいう。また、間壁忠彦・間壁貞子は「造山もふくめ、七つ塚と称された」としているが、後述するように7基の古墳がかつては存在したようである。

間壁忠彦・間壁貞子 1985『日本の古代遺跡 23 岡山』 保育社

- (3) 和田千吉 1919『備中都窪郡新庄下古墳』『考古学雑誌』第9巻第11号

- (4) 永山卯三郎 1930『岡山縣通史』上編

- (5) 梅原未治 1928『備中千足の裝飾古墳』『近畿地方古墳墓の調査3』

- (6) 西川 宏 1975『吉備の國』 学生社

なお、西川はこれに先立つ『陪塚論序説』と題する論文中において、配置状態の3類型中A型一「丘陵上などに、主墳の前方または後方もしくはその両方に一ないし数基存在するもの」の例として造山古墳をあげている。

西川 宏 1961『陪塚論序説』『考古学研究』第8巻第2号

- (7) 春成秀爾 1983『造山・作山古墳とその周辺』『岡山の歴史と文化』

- (8) 宇垣匡雅 1992『吉備の中期古墳の動態－使用石材の検討から－』『考古学研究』第39巻第3号

- (9) 西川 宏 1986 「造山古墳」『岡山県史』考古資料
- ⑩ 間壁忠彦・間壁慶子 1975 「石棺研究ノート(1)石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第9号
- ⑪ 宇垣匡雅 1993 「造山古墳前方部所在石棺について」『古代吉備』第15集
- ⑫ 鴨籠古墳の石棺は阿蘇誕死岩製で、枕部を高くする、蓋に直弧紋を施すなど造山古墳の石棺と共通する特徴を多く持つ。春成秀爾によってその類似が指摘された(註7文献)。また、高木恭二は造山古墳の石棺が熊本県水川下流域で製作された可能性が高いことを指摘している。
- 高木恭二 1986 「鴨別と鴨籠」『Museum KYUSHU』第21号
- ⑬ 和田千吉によると、約70年前、すなわち1860年代に前方部より出土したと伝えられているという。また、造山古墳の北西にかつて存在した新庄車塚古墳から出土したという説もある。いずれも伝聞による記事であり、現在この真偽のほどを論することはできない。1860年代といえば、永山卯三郎の記す新庄車塚古墳の破壊された時期に一致しており気になる所ではあるが、永山の記事に石棺の出土に関する記載は見えない。一方、和田の記する所伝は石柳等は存在しなかったなど具体的で、かつこの石棺についての最も古い出土に最も近い記事であるといえる。また、宇垣匡雅が指摘するように、新庄車塚古墳から出土したものとした場合、蓋身とともに500m程も離れた造山古墳の前方部に運び上げることに不自然さを感じざるを得ない。
- ⑭ 萩原克人 1991 「巨墳の造営」『岡山県史』原始・古代I
1992 「造山古墳とその時代」「吉備の考古学的研究」(下) 山陽新聞社
- ⑮ 註7文献。宇垣匡雅も同様の理由から、これに近い位置付けを与えている。
- ⑯ 松木武彦 1994 「吉備の蓋形埴輪・器財埴輪の地域性研究に関する予察ー」『古代吉備』第16集
- ⑰ 西川 宏 1986 「柳山古墳」『岡山県史』考古資料
- ⑱ 現状ではこれらの各方向に突出部状の平坦面が付設しているようにみえ、いずれとも判断し難い。西川宏は西北西方向に幅・長さとも25m程度の造出しを想定し、形態・方向とも千足古墳と類似するものとする(註17文献)。また、南西側の平坦面からは陶質土器・須恵器が出土しており、これを造出しとする説もある(註20文献)。一方、春成秀爾は註7文献中の図1に南東方向に幅広の造り出しを描いている。
- ⑲ 特に馬形帶鉤に関しては、千足古墳出土との説がある。また、東潮は柳山・千足古墳からの馬形帶鉤の出土自体に疑問を提出している。
- 東潮 1992 「朝鮮渡米の文物」「吉備の考古学的研究」(下) 山陽新聞社
- ⑳ 島崎 東 1982 「備中柳山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』第3号
- ㉑ 註4文献
- ㉒ 註7文献
- ㉓ 宇垣匡雅は削平された古墳を「柳山中丘」とし、その位置を柳山古墳と第4号古墳の間に比定している(註8文献)。しかし、永山卯三郎の「切落されて三角形となれり」という記述から「柳山中丘」は第3号古墳にあたると思われ、「平地となれり」とされる「柳山南丘」が現在存在しない1基であることは疑い得ない(註4文献)。その位置に関しては、和田千吉の示した造山古墳周辺の古墳分布図(第1図)には、第3号古墳と第4号古墳と思われる近接した2点の西に古墳を示す点が記されており(註3文献)、これが「柳山南丘」にあたる可能性が高い。
- なお、第4号古墳にあたる「柳山坤丘」の「坤」は南西を示しているため、第4号古墳の位置に合わないようであるが、規模などの記載から第4号古墳であることは疑い無く、「坤」は「巽」の間違いである可能性が高い。
- ㉔ 西川 宏 1971 「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」『古代学研究』第60号
- ㉕ 西川 宏 1986 「千足古墳」『岡山県史』考古資料
- ㉖ 註4文献
- ㉗ 註7文献
- ㉘ 註24文献

2) 地理的環境

a. 周辺の地形・地質

造山古墳の面する総社平野、足守川流域平野は瀬戸内海の多島海と吉備高原と呼ばれる隆起準平原の山並みに挟まれた平野群—広義の岡山平野の一部である。北を吉備高原の南縁、南を都窪丘陵などで挟まれ、平野内も三手丘陵、黒住丘陵やその他の独立丘陵が存在する。

吉備高原や、都窪丘陵などの山塊は頂が比較的平坦な老年期の山地～準平原が隆起したもので侵食輪廻の地形の発達段階では幼年期にあたる。これらの隆起準平原面は大きく標高400～700mの吉備高原面と300m以下の瀬戸内面(瀬戸内丘陵群)に分けられる。これらの山地、丘陵はほとんどが花崗岩類からなっている。この花崗岩類は中生代白亜紀末から新生代古第三紀にマグマが貫入して形成され、その後の地殻変動と浸食作用によって地表に露出したものである。また、東の中山丘陵や都窪丘陵の最高峰・福山(標高302m)周辺には砂岩質・泥岩質の古生層が分布している。都窪丘陵ではこの古生層との接触部に近い花崗岩中にはタンクスチーン鉱、ウラン鉱が存在する。都窪丘陵は南部・西部では比較的急峻な斜面をなすが、北部・北東部では標高60～70mの丘陵が続き、なだらかな傾斜地、低丘陵となって平地に続いている。造山古墳群をはじめとする数多くの古墳はこうした丘陵上に立地するものがほとんどである。

足守川は吉備高原の高陣山に水源が求められ、深い渓谷をつくりつつ南流し足守付近で吉備高原を出る。造山古墳の前面、三手付近で血吸川、前川を合わせた砂川と合流、古新田で笛ヶ瀬川に合流する。また、古くは高梁川が総社市湛井付近から東に曲流し足守川に合流していたという。水期には海平面の低下により瀬戸内海は陸地化していたといわれ、塩鮑諸島付近を分水嶺として東流した流れは古大阪川に合流し紀伊水道から、西流したものは豊後水道から太平洋に注いでいた。この地域は隆起運動の不活発な地域であり、侵食された老年期の山地が後氷期の海進により水没した姿が瀬戸内海の多島海である。足守川流域平野も海進により谷部に浸入した海を埋める形で発達した沖積平野ととらえられる。海進の最盛期には沖積地部分は大半が水没していたと思われるが、その実態はほとんど未解明である。弥生時代～古墳時代には高梁・足守川は庭瀬、撫川付近で吉備穴海に注いでいたといわれており、弥生時代、古墳時代の集落遺跡もこの付近が南限となっている。

b. 周辺の景観

瀬戸内型気候は一般に雨の少ない温暖な気候といわれ、少雨であることと日照時間が長いことが特徴である。そのためこの地域でもため池が多く作られている。この地域は農業を主とする田園地帯である。山寄りの丘陵地ではブドウ・モモなどの果樹栽培、平地は夏には水稻、冬にはイ草やムギを栽培する。一帯は「吉備路風土記の丘県立自然公園」「吉備史跡県立自然公園」の二つの県立公園に指定され景観保全に一定の規制が課せられている。しかし、地域住民や歴史的景観を無視した囲い込み的な指定であり、指定直前には駆け込み普請やこれに抗議して自分の所有地内の古墳を破壊するといった事件まで引き起こした。また、かえって周辺の開発、遺跡の破壊を加速させた感は否めない。かつては岡山の典型的な農村であったこの地域も、岡山・倉敷に10km前後という距離もあり、急速に宅地化が進んでいる。現在付近を山陽自動車道、岡山自動車道が通り、工業団地の誘致、ゴミの埋め立て処分場、山土採取など変化の波は確実に押し寄せてきている。

c. 造山古墳群付近の地形と景観

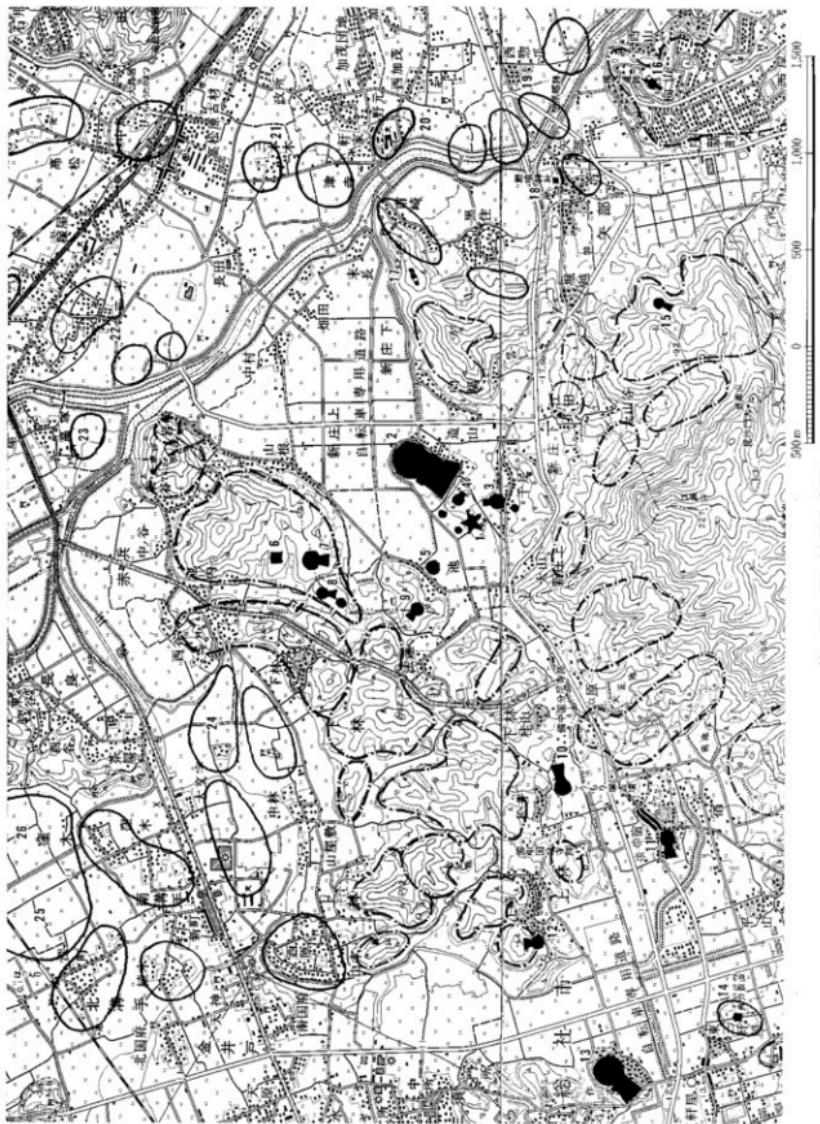
造山古墳群は都窪丘陵東部の仕手倉山（標高224m）から北側に派生する尾根の末端、標高10~30mの低丘陵上に立地する。なお造山古墳はこの丘陵最末端を整形・盛り土して築造されていると考えられる。西側を三須丘陵、東側を黒住丘陵の標高60~70mの丘陵に挟まれた谷状地形のほぼ中央付近から谷奥にある。付近には、新庄上、新庄下、千足などの集落があるが、多くが水田、畑地、果樹園であり、造山古墳や造山古墳群の古墳も昭和40年代に岡山市が買い上げるまでは柿などを栽培する果樹園や畑地として利用されていた。

造山古墳群の立地する丘陵の両側の低地部は、現在では一面に水田が拡がっているが、大正年間のは場整備以前は低湿な後背湿地であった。このは場整備に際しては、多量の土砂が造山古墳群の丘陵から採取され低地部に埋められたと伝えられ、この際造山古墳群の古墳も大きく損なわれたと言われる。しかし、それほど多量の土砂を採取しながら、滅失した古墳は「柳山南丘」古墳と既に江戸時代末期にかなり削平されていたと思われる新庄車塚古墳のみで、造山古墳をはじめとする現存する古墳が思った以上によく旧状を残していることは、ひとえに地元住民の先人の墳墓に対する畏敬の念があったためと思われる。

参考文献

- 高橋達郎・福岡義隆・斎藤伸英ほか 1983 「岡山県史」第1巻 自然風土
 安藤久次・海津正倫・中村和郎・山中二男 1995 「東西にのびる内海と山なみー中国・四国の自然」『日本の自然 地域編6 中国四国』 岩波書店
 光野千春・沼野忠之・高橋辰朗 1982 「岡山の地学」 山陽新聞社
 西川 宏 1975 「吉備の国」 学生社

-
1. 造山第4号古墳 2. 造山古墳 3. 千足古墳 4. 構山古墳 5. 新庄車塚古墳 6. 折敷山古墳
 7. 小造山古墳 8. 夫婦塚古墳 9. 銭瓶塚古墳 10. こうもり塚古墳 11. 宿寺山古墳 12. 江崎古墳
 13. 作山古墳 14. 角力取山古墳 15. 矢部大塙古墳 16. 楠栄弥生墳丘墓 17. 雲山鳥打弥生墳丘墓群
 18. 鯉喰神社弥生墳丘墓 19. 矢部南向遺跡 20. 加茂遺跡 21. 津寺遺跡 22. 三手遺跡 23. 高塚遺跡
 24. 蓬木瀬師遺跡 25. 南溝手遺跡 26. 蓬木遺跡
- 古墳時代後期群集墳



第2図 周辺遺跡分布図

3) 歴史的環境と周辺の遺跡

a. 歴史的環境

旧石器・縄文時代

この地域に人類の痕跡が認められるのは旧石器時代からで、浅尾遺跡¹⁰、宝福寺裏山遺跡¹¹など総社平野北辺の丘陵上などから散発的に石器の出土が知られている。縄文時代には縄文時代早期の遺構・遺物が総社市真壁遺跡¹²、長良山遺跡¹³、倉敷市矢部奥田遺跡¹⁴などで出土している。海進によって現出した新たなる環境である沖積地に本格的に人々が進出するのは、縄文時代後期以降とみられる。総社市南溝手遺跡¹⁵、同窪木遺跡¹⁶、真壁遺跡では縄文時代後期、晚期の多くの遺物が出土、吉野口遺跡¹⁷では晩期の土器とともに竪穴住居と見られる遺構、炉跡などが検出されている。

弥生時代

弥生時代前期になると遺跡は増加し、高梁川分流域では真壁遺跡、総社市山津田遺跡¹⁸、南溝手遺跡、窪木遺跡など、足守川流域では東山遺跡¹⁹、川入遺跡²⁰などで遺構・遺物が検出されている。弥生時代中期前葉～中葉には新邱貝塚²¹、吉野口遺跡などがある。前期～中期を通じて全体的に遺跡は小規模で、旭川流域平野における南方遺跡などのような拠点的集落は形成されないようである。

弥生時代後期になると、足守川流域に高塚遺跡²²、津寺遺跡²³、矢部南向遺跡²⁴、上東遺跡²⁵など大規模な集落が出現する。一方、高梁川分流域には真壁遺跡、窪木遺跡、美野田遺跡²⁶などが存在する。また、後期後半には橋築弥生墳丘墓²⁷をはじめ、鯉喰弥生墳丘墓²⁸、雲山鳥打弥生墳丘墓群²⁹、矢藤治山弥生墳丘墓³⁰、宮山弥生墳丘墓³¹など大規模な墳墓が築造される。橋築弥生墳丘墓は矢部丘陵に立地する双方中円形の弥生墳丘墓である。両突出部を含めると全長70mを超える当時最大の墳墓であり、円丘部には巨大な立石を並べ、特殊器台を伴っており、この地域に収まらず吉備全域に力を及ぼし得るような首長の墳墓と見られる。また、矢藤治山弥生墳丘墓、宮山弥生墳丘墓の両墳丘墓は前方後円形の墳形と最新段階の特殊器台を伴っており、規模、主体部、副葬品など共通点が多い。また奈良県纏向石塚との類似も指摘されており、古墳出現直前の墳墓として注目される。

古墳時代

古墳時代前期においても津寺遺跡を中心とする遺跡群はさらに拡大する。また、特殊器台形埴輪をもつ矢部大塙古墳³²をはじめ、足守川を挟んだ対岸の吉備中山山上に尾上車山古墳³³、中山茶臼山古墳³⁴が築かれる。

古墳時代中期には造山古墳、総社市作山古墳をはじめとする大形前方後円墳が次々と築造されるようになる。造山古墳群の西側の丘陵上、三須丘陵の東端部には小造山古墳³⁵、夫婦塚古墳³⁶、銭瓶塚（銭瓶ぐろ）古墳³⁷、折敷山古墳³⁸などが築かれる。また、三須丘陵の南から南西の平野部には県下第2位、全国第9位の規模を誇る作山古墳³⁹、宿寺山古墳⁴⁰、角力取山古墳⁴¹などが存在する。三須丘陵など周辺の丘陵には数多くの中小の前半期古墳が築かれている⁴²。また集落遺跡としては、高塚遺跡、津寺遺跡などがあげられ、朝鮮半島系の土器も多く出土している。

古墳時代後期には一帯に大小の横穴式石室墳が築かれ、一大群集墳地域となる。全長約100mのこうもり塚古墳⁴³、全長45mの江崎古墳⁴⁴といった前方後円墳も存在する。こうもり塚古墳は全長19.4mという吉備最大の巨大な横穴式石室をもち、「浪形石」と呼ばれる岡山県井原市産の貝殻石灰岩製の家形石棺がおかれており、江崎古墳は石室全長13.8mを測り、貝殻石灰岩製の家形石棺を備える。また周辺にも綠

山古墳群など準巨石墳と言えるような有力古墳が存在する。また、平野北辺の山麓には千引遺跡、カナクロ谷遺跡などの製鉄関連遺跡⁹⁸が存在し、集落遺跡では窪木薬師遺跡⁹⁹、吉野口遺跡のように鍛冶遺構を伴う集落が知られており、鉄の精錬から製品の生産までこの地域で一貫して行われていたことが伺われる。

古代以降

古代にはこの地域は、備中の中心地として備中国分僧寺・国分尼寺が築かれ、備中国府も總社平野のほぼ中央部に想定されている。また北部の鬼城山には古代山城「鬼ノ城」があり、この麓には吉備大宰府が存在したのではともいわれる。都窪丘陵の北麓には官道・山陽道が通り、津峠駅が置かれた。中世末には織田・毛利両軍の激突する最前線となり、備中高松城の水攻めなど羽柴秀吉の天下取りの舞台として知られるようになる。江戸時代にはこの地域は、岡山、足守、松山、苅田、岡田、庭瀬など各藩の所領が入り組み、近世西国街道の宿場は東の板倉、西の川辺とこの地域を避けるように置かれ、そのため農村的景観が定着して行った。

b. 周辺の遺跡

ここでは造山古墳・造山古墳群に關係の深い周辺の中期大形古墳を中心に見ていくこととする。

小造山古墳（岡山市新庄上・總社市下林）

小造山古墳は全長約135m、後円部径約92m、同高さ約12m、前方部前端幅約86m、前方部高さ約9mを測る三段築成の前方後円墳である。後円部の周囲には周溝が存在する。かつては造山古墳に先行すると考えられてきたが、出土埴輪から川西編年のIV期、5世紀中葉に位置付けられる。

夫婦塚古墳（岡山市新庄上・總社市下林・赤浜）

小造山古墳の南西約150mの尾根上に立地する全長約45mの帆立貝式前方後円墳である。後円部のほぼ中央に竪穴式石槨が存在する。円筒埴輪片が採集されており、その特徴から6世紀代の築造と考えられる。本墳の南約40mには縦笠古墳が存在する。

銭瓶塚古墳（岡山市新庄上・總社市下林）

銭瓶塚（銭瓶ぐろ）古墳は小造山古墳の南方約500mに位置する全長約50m、後円部径約35m、同高さ約8m、前方部は長さ幅とも約15mの前方後円墳である。後円部中央に盃掘孔があり、「兜」を出土したとの伝承もある¹⁰⁰。

折敷山古墳（總社市赤浜）

折敷山古墳は小造山古墳の谷を隔てた北側の尾根上に立地する一辺約40mの方墳である。円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか短甲など形象埴輪が出土しており、5世紀の第2四半期ごろに比定されている。

作山古墳（總社市三須）

作山古墳は全長286m、後円部径174m、同高さ約24m、前方部長110m、同前端幅174m、三段築成の前方後円墳である。各段には円筒埴輪列が巡る。埴輪には円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか蓋、肩甲の形象埴輪が知られている。円筒埴輪は大半が無黒斑で外面の二次調整はB種ヨコハケが多く、川西編年のIV期に位置付けられる。5世紀中葉の築造とみられている。

宿寺山古墳（都窪郡山手村宿）

宿寺山古墳は全長118~120m、後円部径64ないし75m、同高さ10m以上、前方部前端幅62m、前方部高さ8.5mを測る二段築成の前方後円墳で、周囲に盾形の周溝の跡がある。1889年、1920年に地元の人により発掘され、竪穴式石室から変形四神鏡、盤竈鏡、刀剣、鐵鎌、鋸子、玉類などが出土した。前方部

にも竪穴式石槨があったとの伝えもある。また、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか蓋などの形象埴輪が採集されている。円筒埴輪は無黒斑で二次調整にB種、C種ヨコハケを施すもので、川西編年IV期に位置付けられる。築造時期はこれらの特徴から作山古墳に後続する時期とされている。

角力取山古墳（都窪群山手村東三軒屋）

角力取山古墳は作山古墳の南方に所在する一辺38mの大形方墳で、出土埴輪から造山古墳とはほぼ同時期と考えられている。また、角力取山古墳の南東には一辺23mの方墳、赤阪竈塚古墳¹⁰⁰が存在する。

註

- (1) 鎌木義昌・小林博昭 1987 「浅尾遺跡」『総社市史』考古資料編
- (2) 間壁茂子 1967 「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号
鎌木義昌・小林博昭 1987 「宝福寺裏山遺跡」『総社市史』考古資料編
- (3) 村上幸雄・高田明人・谷山雅彦 1987 「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編
- (4) 村上幸雄 1987 「長良山遺跡」『総社市史』考古資料編
- (5) 高畠知功ほか 1993 「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82
- (6) 平井泰男ほか 1995 「南溝手遺跡1」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100
平井泰男ほか 1996 「南溝手遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107
- (7) 岡田博ほか 1997 「塙木遺跡1」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120
- (8) 草原孝典ほか 1997 「吉野口遺跡」『岡山市教育委員会
- (9) 高田明人 1984 「山津田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 総社市教育委員会
高田明人 1987 「山津田遺跡」『総社市史』考古資料編
- (10) 乗岡 実 1990 「岡山市域における最近の発掘調査成果」『古代古備』第12集
- (11) 正岡隆夫 1974 「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集
- (12) 近藤義郎 1953 「備中新邱貝塚」『古代学研究』8
- (13) 岡本寛久ほか 1990 「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』20
- (14) 大橋雅也ほか 1993 「津寺遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98
亀山行雄ほか 1996 「津寺遺跡3」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104
亀山行雄ほか 1997 「津寺遺跡4」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116
- (15) 江見正ほか 1996 「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94
- (16) 伊藤 晃ほか 1974 「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集
- (17) 村上幸雄 1987 「美野田遺跡」『総社市史』考古資料編
- (18) 近藤義郎 1992 「楯築弥生墳丘墓の研究」楯築刊行会
- (19) 近藤義郎 1980 「矢喰・鶴喰・楯築」「鬼ノ城」鬼ノ城学術調査委員会
- (20) 近藤義郎 1986 「雲山鳥打弥生墳丘墓群」「岡山県史」考古資料
- (21) 近藤義郎ほか 1995 「矢藤治山弥生墳丘墓」矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- (22) 高橋 譲・鎌木義昌・近藤義郎 1987 「宮山墳墓群」『総社市史』考古資料編
- (23) 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田 尚 1984 「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集
- (24) 水内昌康 1986 「尾上車山古墳」「岡山県史」考古資料
- (25) 近藤義郎 1986 「中山茶臼山古墳」「岡山県史」考古資料
- (26) 中田啓司・近藤義郎 1987 「小造山古墳」『総社市史』考古資料編
村上幸雄・前角和夫 1993 「小造山古墳の埴輪について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
- (27) 谷山雅彦 1987 「夫婦塚古墳・編笠古墳」『総社市史』考古資料編
- (28) 高田明人 1987 「錢瓶塚古墳」『総社市史』考古資料編
- (29) 谷山雅彦 1987 「折敷山古墳」『総社市史』考古資料編
村上幸雄・前角和夫 1993 「折敷山古墳の調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10

- 30 春成秀爾 1983 「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』
葛原克人 1986 「作山古墳」『岡山県史』考古資料
村上幸雄・前角和夫 1993 「周辺古墳出土の埴輪について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
31 梅原末治 1925 「備中郡窪郡の二三の墳壁について」『歴史と地理』15-1
西川 宏 1986 「宿寺山古墳」『岡山県史』考古資料
村上幸雄・前角和夫 1993 「周辺古墳出土の埴輪について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
32 西川 宏 1975 『吉備の国』 学生社
33 岡山大学考古学研究部 1976 「三須丘陵遺跡分布調査報告」
34 葛原克人 1979 「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35
35 近藤義郎ほか 1987 「江崎古墳」『総社市史』考古資料編
36 近藤義郎・北條芳隆ほか 1987 「岡山県総社市 緑山古墳群」『総社市文化振興財団』
37 武田恭彰 1991 「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』1
38 島崎 東ほか 1993 「逢木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86
39 永山卯三郎 1937 『吉備郡史』巻上
40 註文献

第II章 調査の経過と概要

1) 調査の契機と経過

造山古墳およびその陪塚群といわれる古墳群は1921年（大正10年）国指定史跡に指定されている。そのうち第4号古墳は現状で丘陵端部に位置する円墳状の古墳であり、史跡指定範囲も円墳部分を対象としている。

この丘陵端部を通る市道新庄下49号線外2線の拡幅が岡山市により計画された。この拡幅に伴い丘陵を横切る部分にあたる古墳群中の第3号古墳、第4号古墳隣接地では、畑地、水田を削平、擁壁を構築することとなった。当地は史跡指定地外であり、第3号古墳、第4号古墳と予想されるその付属施設からも十分に離れていると考えられ、また古墳以外の遺跡としても認識されていなかったため、工事直前に試掘調査を実施するよう指示した。

試掘調査は1991年（平成3年）5月15日、文化課職員の立ち会いのもと第4号古墳隣接地にパワーショベルでI～IVの4本のトレントを掘削した。その結果、トレントIでは地山と考えられる花崗岩風化土の上は大正年間の区画整理に伴うと思われる造成盛土が厚く存在していたが、トレントIIからは多量の埴輪片が出土、トレントIII・IVでは現在の耕作土直下まで地山であった。これはトレントIIの状況が第4号古墳に付属する周溝などであり、トレントIII・IVは削平により盛土が失われているが第4号古墳に伴う突出部あるいは前方部である可能性が高いと思われた。そのため、現状保存を図るために工事計画の一時凍結と計画の変更を当局に要請すると共に、トレント部分に関しては同年5月24日まで現状で記録をとることに努めた。また第3号古墳隣接地についても同様の状況を危惧し、第4号古墳関連施設の記録終了後パワーショベルでトレント①～③（第5図）の3本のトレントを掘削、第3号古墳関連施設等の存在しないことを確認した。

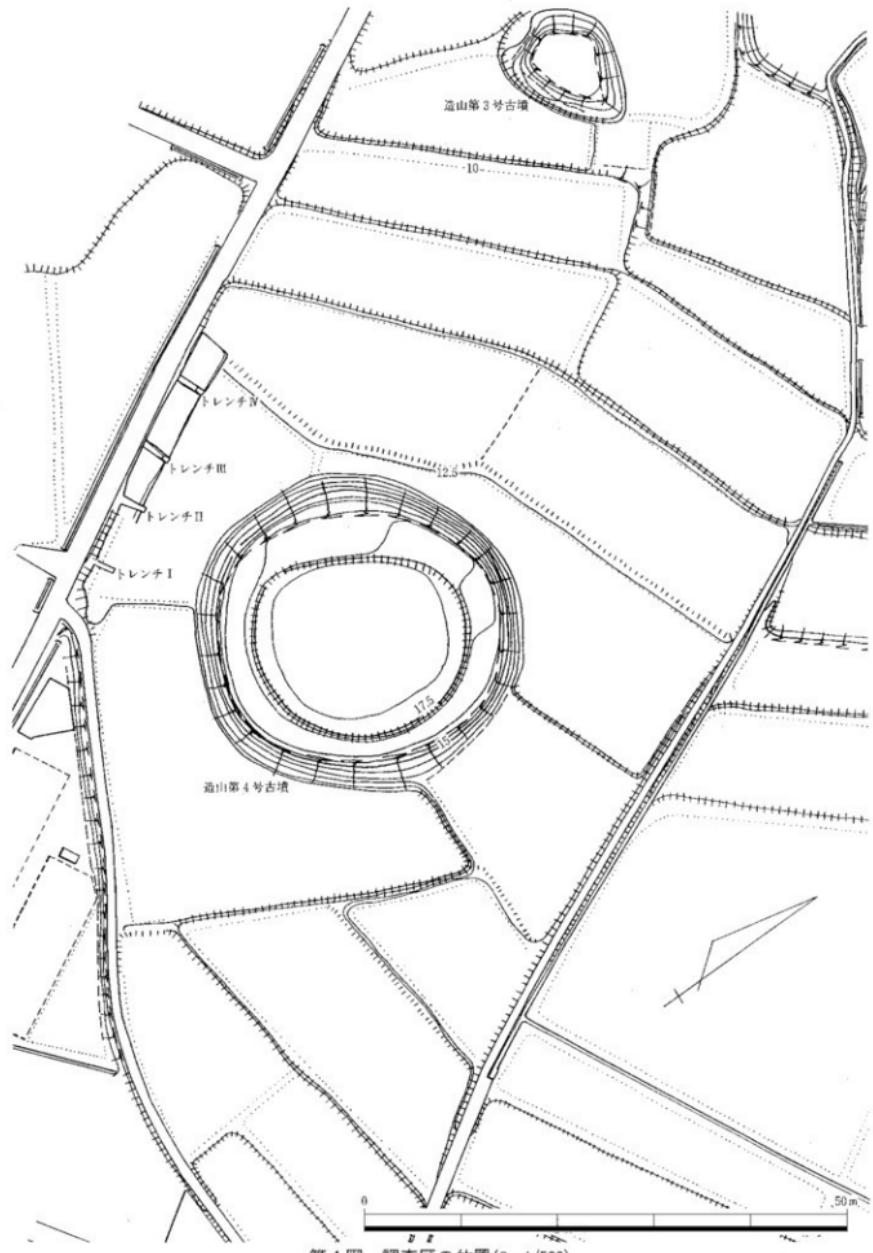
第4号古墳の調査は現状保存が決定したこともあり、検出遺構の性格把握のための最小限の範囲で実施した。調査範囲は市道拡幅計画の幅約3mで、北端の畑地区画の段から埴輪片が多量に出土した溝状遺構の外側までの約20mにわたった。トレントII周辺では出土した埴輪片の記録と出土状況の追及を行い、トレントIII・IV周辺では表土を除去し、地山上面での造構検出に努めた。

記録終了後、平成3年5月27日付けで岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法第57条の6第1項に基づく「遺跡発見の通知」が提出された。

なお、現状記録に際しては、当教育委員会文化課文化財保護主事 神谷正義、同文化財保護主事 安川満がその任にあたった。また報告書の作成にあたっては西川宏氏、松木武彦氏らのご教示、ご助言をいただいた。記して深謝する次第である。



第3図 調査区位置図($S=1/5,000$)



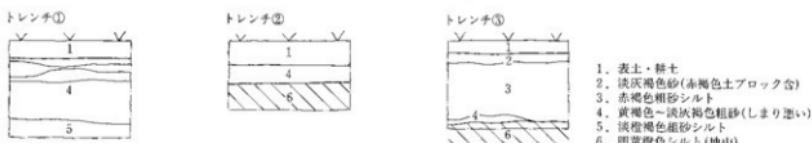
第4図 調査区の位置 (S=1/500)

2) 調査の概要

試掘調査地点は造山古墳第4号古墳隣接地の丘陵端部にあたり、畠地、およびは場整備と既存の農道(市道新庄下49号線)による法面となっていた。第4号古墳は径約35mの円墳と考えられており、史跡指定も円墳としての範囲に限られたものであった。また、第4号古墳周辺の畠地は北側が一段下がって標高12.1~12.2mの面になっており、東側が標高13.7mと若干高くなっているほかは、標高13.0mのはば平坦な面をなしており、第4号古墳に付属する前方部などの施設の存在を示すものは存在しない。ただし、周辺は大正年間に行われたは場整備によって地形が変更されており、特に第4号古墳の西、農道の西側では丘陵末端がほぼ削平されており、第4号古墳周辺もどれほどの改変が及んでいるものかわからぬ状況であった。したがってトレンチIIにおいて検出した遺構・遺物も、①第4号古墳の周溝及び第4号古墳に伴う埴輪群。②古墳以降の遺構に堆積した第4号古墳に伴う埴輪群。③削平された別の古墳に伴う遺構・遺物。など複数の可能性が考えられ、同時にトレンチIII・IVで検出した地山の高まりに関するとしても、第4号古墳の一部、あるいは他の古墳の盛土が削平されたもの、丘陵の尾根などの可能性が考



第5図 造山古墳第3号古墳隣接地トレンチ位置図



第6図 第3号古墳隣接地トレンチ柱状図(S=1/20)

えられる状態であった。そのため、拡幅計画の幅でトレンチIIを拡張しこの遺構・遺物の性格および第4号古墳との関係を追及するとともに、トレンチIII・IV周辺も表土を除去し地山面の状況を追及した。

トレンチIII・IV周辺では15m程度の幅で標高12.9m程の開墾による平坦面となっており、古墳の一部であることを示すような遺構、盛土などは検出されなかった。それに対しトレンチII部分では最も深い部分で標高11.9mを測り、北側は急斜面をなすが南側、すなわちトレンチIの方向はかなり緩やかな斜面で構とはやや言いにくい状況であった。しかし埴輪片は遺構底部に集中しており、北側斜面も第4号古墳墳丘にはほぼ直交する方向で、第4号古墳に付属する前方部あるいは突出部として矛盾のない状況であった。また、溝状遺構の底部で性格不明の方形土壙を検出した。

第3号古墳隣接地の①～③のトレンチ（第5図・第6図）では第3号古墳関連施設ほか埋蔵文化財包蔵層は確認し得なかった。トレンチ③では地表から33cm、標高9.05m付近から、トレンチ②では地表下18cm、標高8.65m付近から明黄橙色シルトの地山となっており、表土との間には場整備の造成盛土と思われる層であった。トレンチ①では地表下33cmで地山類似の淡橙褐色シルト質粗砂を検出したが、地山土の二次堆積と思われ、その上層はしまりの悪い砂層が堆積していた。

調査日誌（抄）

平成3年5月15日㈬ トレンチI～IV掘削。遺構・遺物確認。

- 16日㈭ 表土掘削。トレンチII断面実測。
- 17日㈮ 周溝状遺構掘削開始。
- 18日㈯ 造出し状遺構平面実測。
- 20日㈪ 墓輪出土状況検出。同写真撮影、実測開始。
- 22日㈬ 墓輪取り上げ。土壙状遺構検出。
- 23日㈭ 土壙状遺構平面・断面実測。周溝状遺構横断面実測。
- 24日㈮ 調査終了。

第三章 遺構と遺物

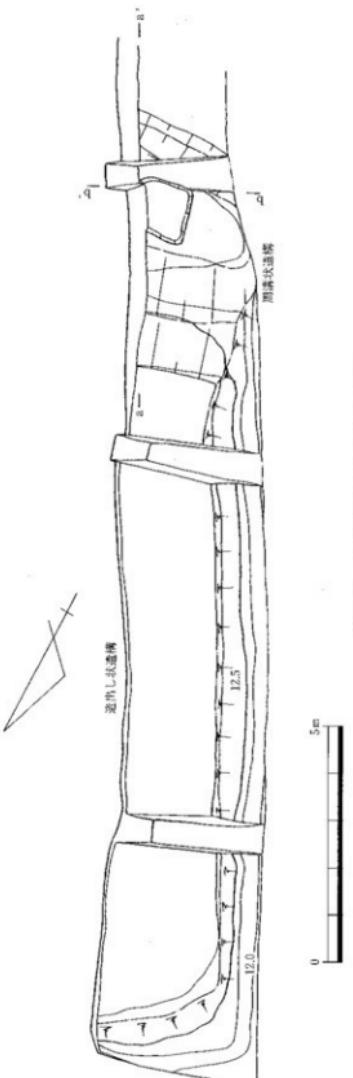
調査はトレンチII～IIIで検出した諸遺構の性格を追及するため、最小限の範囲一市道拡幅計画の拡幅部分の幅で、約20m×3mの範囲にわたり行った。調査では造山第4号古墳に関連するものと思われる遺構および埴輪などの遺物を検出した。調査の経過に関しては前章に譲るとして、ここではその各遺構・遺物について述べることとする。

1) 検出遺構

検出遺構に関しては前章で第4号古墳に関連するものである可能性が高いことを述べたが、限られた面積の調査でもあり確証を得るに至らなかった。したがって、トレンチIII・IVを中心として検出された地山の高位部を「造出し状遺構」、トレンチIIを中心として検出された溝状遺構を「周溝状遺構」と仮に呼び記述を進めることとする。

a. 造出し状遺構

トレンチIII・IVにおいては表土である畑地耕作土直下は黄褐色砂質シルトの地山であり、トレンチI・IIの状況とは大きく異なっていた。この高まりは調査範囲の北よりに差し渡し14mにわたっており、上面は標高12.9～13.2m程の高さで平坦面となっていた。周囲は北側が畑地、水田区画の比高差約0.9mの段、西側が市道により削られた法面、南側が周溝状遺構によって限られている。この部分は第4号古墳らが立地する丘陵の尾根部分に当たっており、また盛土なども存在せず、この高まりが自然の地形及び畑による削平によるものとも考えられたが、南辺は周溝状遺構を境に約0.5～0.6mの比高差をもつていてこと、第4号古墳に極めて近接していることから、第4号古墳および周溝状遺構と一体のものー第4号古墳の造出しないし前方部の可能性が高いもの



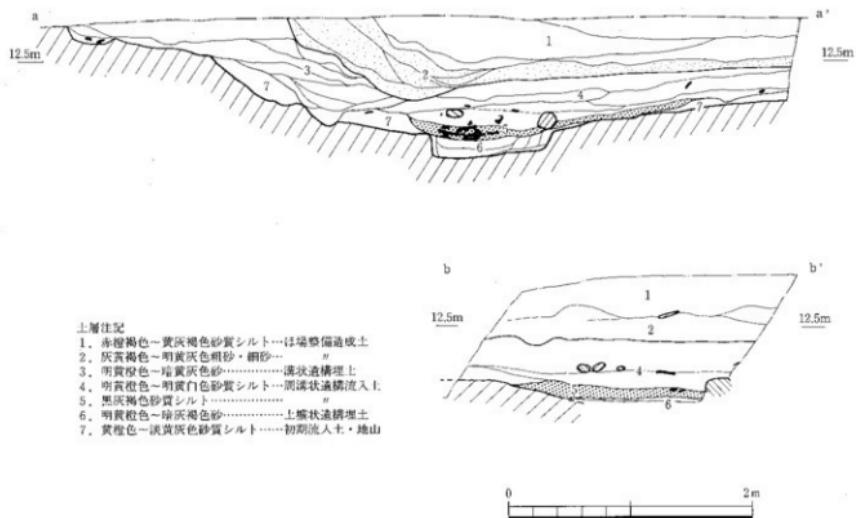
と思われた。しかし、削平のためかこの部分では主体部、埴輪基底部およびその掘り方・脱痕等、自然地形でないことや第4号古墳との関係を示すような遺構は検出されなかった。

b. 周溝状遺構

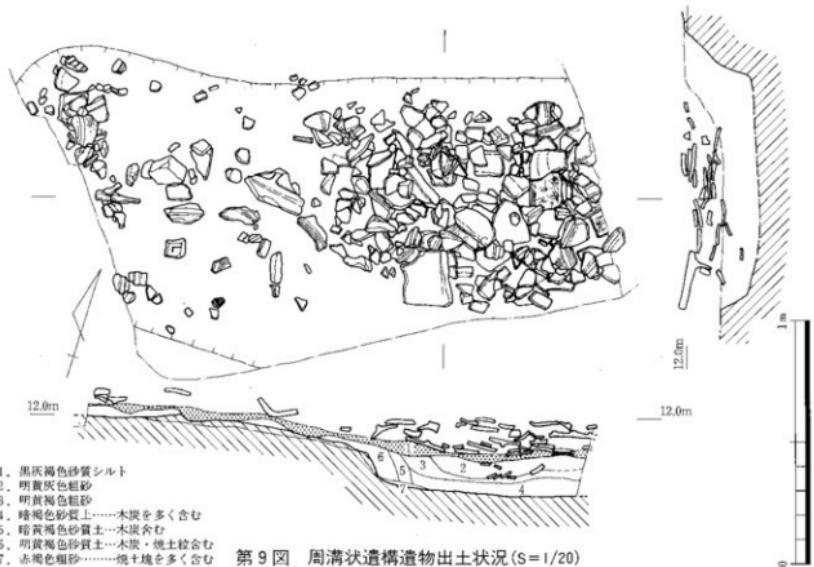
i) 層位と形態

周溝状遺構部分の土層は大きく4層にわけることができる。第8図にあげたのは調査範囲東辺の壁であるa-a'セクションとトレンチII北壁であるb-b'セクションである。

第1の層は大正年間のは場整備に伴う造成土と考えられる層で、第8図の1、2層がこれにあたる。1層は地山起源の黄褐色シルト質土をブロック状に含む花崗岩風化土を主体とする層。2層はより締まりの悪い砂層である。土質から判断する限り、1層は造出し状遺構部分や丘陵高位部などを削平し、低い部分を埋めたもの、2層は丘陵下の低地や他の場所から持ち込まれたものと考えられる。1層、2層間に耕作土や土壤化した層は認められず、前後2度の造成によるものではなく、一連の造成によるものと考えられる。



第8図 周溝状遺構土層断面図(S=1/40)



第9図 周溝状造構遺物出土状況(S=1/20)

第2の層は大正年間以前の畠地・水田区画に伴うものと考えられる溝状造構の埋土、造成土であり、第8図3層がこれにあたる。この層は花崗岩風化土を主体とするよく締まった層であり、人為的に埋められた可能性もある。

第3の層は周溝状造構の埋土であり、第8図4、5層がこれにあたる。4層は明黄褐色～明黄白色砂質シルト層であり、埴輪片を含んでいる。地山起源のシルト質土の二次堆積と思われる。5層は黒灰褐色砂質シルト層で、大形の埴輪片が折り重なるように多量に含まれている。強く土壤化していることからも長年地表面になっていたことがわかる。6層は性格不明の方形土壌状造構の埋土である。

第4の層は第8図7層で、周溝状造構の初期の流入土と考えられる層である。この層は比較的締まりの良い黄褐色～淡黄褐色砂質シルト層であり、極僅かに埴輪片を含む。地山と見分けがつきにくい部分もある。

周溝状造構の北側は標高12.9mの造出し状造構、南側はトレーンチ1部分で地山面の高さが標高約12.3mと両側でおよそ0.5～0.6mの比高差があり、周溝状造構斜面も北側は50%程度の比較的急な斜面であるのに対し、南側の斜面は約15%程の緩やかな斜面となっており、全体として「溝」とはやや言いにくいう状況であった。なお、北側斜面の標高12.6m付近より上の斜面は約20%とやや緩やかになっているが、

これはa-a'セクションにみると3層の溝状遺構によって削られているためと思われる。

周溝状遺構の底部は、土壤状遺構を除き、標高12.0m付近であり、北側の造出し状遺構上面との比高差は0.9~1.0mを測る。また、縦断方向では周溝状遺構底面が西側へ僅かに上昇しており、市道法面部分では標高12.1m付近であった。周溝状遺構の平面形は、造出し状遺構側の斜面をみると直線的に第4号古墳にはば直交するものとみられる。南側の斜面では平面形ははっきりしないが、斜面や等高線をみると東側-第4号古墳の側ほど幅が広がっているように見える。

ii) 遺物出土状況

遺物は上層出土の土器、須恵器の小片を除くと、すべて埴輪片であり、3層、7層中からも僅かに出土しているものの大半は4層、5層の出土である。特に、5層からは大形の破片が集中して検出された(第9図)。埴輪片には原形を保ったまま破碎しているものは存在しないが、同一個体と思われるものが比較的近い位置に存在しており、風化も激しくないなど大きく移動したものとは考えられない。この5層は先述のとおり土壤化の進んだ黒灰褐色砂質シルト層であり、長く地表面になっていたものと思われ、この層に含まれる埴輪片は造出し状遺構上に存在したものが倒壊したものと思われる。

また、埴輪破片に混じって拳大から人頭大の角礫、亜角礫が含まれるが、量は少なく造出し状遺構の葺石が転落したものとは思われない。造出し状遺構の斜面にも葺石は存在しない。

iii) 土壤状遺構

周溝状遺構底部からは方形の土壤状遺構を検出した。この土壤状遺構は周溝状遺構のほぼ中央にこれにはば平行して存在する。東側の一部は調査範囲外でているため正確にはわからないが、一辺約1.2mのほぼ正方形で、深さ約0.2mを測る。土壤状遺構底部はほぼ平坦で、埋土上層に埴輪片を含むほかは遺物は出土していない。埋土は大きく2層に分けられる(第8図6層、第9図縦断面)。上層は明黄灰色~明黄褐色粗砂で締まりはやや悪く、摩滅した埴輪破片を含んでいる。下層は木炭、焼土粒を含む暗褐色~暗黄褐色砂質土である。遺構の性格は不明であるが、周溝状遺構の初期流入土と思われる土層が土壤状遺構内下層に流入している様子が観察でき、当初は埋葬主体などのように埋められた状態ではなく、露出した状態にあったものと思われる。

c. まとめ

検出した遺構は「造出し状遺構」と呼んだ地山の高まりと、「周溝状遺構」とした地山削り出しの斜面であり、これらが造山第4号古墳に関係する遺構である直接的な証拠は得られなかったといえる。しかし、①周溝状遺構は堆積土中では最下層にあたるもので、周囲の地山の整形を伴っているものと思われ、さらに長期間地表に露出した状況であったと考えられること。②造出し状遺構は上面が削平されているとはいえ、周溝状遺構南側とはなおも0.5m以上の比高差をもっており、単に自然地形を反映したものとは思われないこと。③埴輪片は大形で器面の残りも良く、同一個体と思われるものが比較的集中しているなど、遠い距離を移動したもの、二次的に動かされたものなどとは思われず、また長期間露出していたと思われる土壤化した5層に含まれていること。④これらの遺構は第4号古墳墳丘からおよそ10~15mの位置にあり、第4号古墳以外の古墳や埴輪窯などほかの構造物が存在する余地や可能性は低いと考えられること。⑤周溝状遺構の方向は第4号古墳墳丘にはば直交する方向であり、造出し状遺構も第4号古墳の付属施設として構造的に矛盾がないこと。などの状況証拠から検出された遺構が第4号古墳に関係する遺構、第4号古墳の造出しあるいは前方部である可能性は高い。

以上から造山古墳第4号古墳は、径約35mの円墳と考えられていたが、造出しあるいは前方部を備え

た墳形である可能性が高くなった。検出された造出し状造構は先述のように、北側は畠地・水田区画の比高差約0.9mの段、西側は市道による法面となっており、周溝状造構部分を除くと墳端などを示すものは存在しない。仮に北側の段をもとの前方部の形状をある程度反映するもの、前方部前端も検出部分を大きく上回らないものと仮定すると、おおよそ前方部の長さ、幅とも18m程度で、前端側がやや聞く前方部の形状になるものと思われる。この前方部の規模と形状は、北側も西側も丘陵自体が次第に下がっているので、大きく上回ることはないとと思われる。また、後円部も周囲を削られているようであり、本来は現状より若干大きなものと思われる。以上から復元される第4号古墳の墳形は、全長55mを前後する規模のいわゆる帆立貝形前方後円墳であると思われる。

一方、周溝は検出した周溝状造構が西側に狭く、溝底のレベルもやや高くなっていくこと、第4号古墳の北側、西側は丘陵が急激に下がっていくことから、第4号古墳の周囲を完全に囲むものではなく、丘陵の高位部と墳丘を切り離すような形態のものであったと思われる。現状では墳丘東側に墳丘に沿うようなカーブを描く比高差約1.0mの段があり、これが周溝の一部、あるいはその名残であるとすると、周溝の幅は約8～9mとなる。この段と後円部中心との距離を半径とする後円部の同心円を描くと、検出した周溝状造構にはばつながる。周溝状造構の部分では墳丘外側が不明瞭になっており、また前端側に溝底も浅くなっているなど、周溝は前方部前端方向に掘り放した状態、あるいは後円部の周囲のみを囲み前方部部分に取り付くような耳環形のものであると思われる。

2) 出土遺物

出土遺物は上層から出土したわずかの土器、須恵器の小破片を除くとすべてが周溝状造構より出土した埴輪類であり、円筒、朝顔形、短甲形、蓋形、家形などの各種埴輪が存在する。そのうち主なものを第11図～第16図に図示し、その特徴を観察表に記した。なお、調整、胎土などから同一個体と思われるものには同じ番号を付した。また、離れた部位の破片は焼成なども変化があり、同一個体を判断することが難しいため、調整、胎土などが類似し同一個体の可能性が考えられるものであっても別の番号を付した。なお埴輪の部分の呼称は第10図に従うものとする。

a. 朝顔形埴輪・円筒埴輪

i) 朝顔形埴輪（第11図、第12図上）

朝顔形埴輪は口縁部～肩部以外は円筒埴輪、形象埴輪基部との区別が難しい。しかし、朝顔形埴輪口縁部～肩部の破片はすべて窯窓焼成と判断できるものであり、しかもかなり硬質なもの、須恵質を呈するものが多く、筒部～基底部の破片のうち須恵質を呈する15、16、17は朝顔形埴輪である可能性が高い。

口縁部は受部から屈曲して立ち上がり、やや強く外反する。口縁端部は端面を強くヨコナデして下に僅かに垂下するもの（1）、下面にナデによる凹面をもつもの（2）がある。口縁端部の端面、タガ端面はハケメ原体、あるいはそれに類するヘラ状の工具で形を整えた後ヨコナデされているようで、体部のハケメと同様の条線が認められる。口縁部、受部の調整は基本的に外面がタテハケ、内面が横方向から斜め方向のハケメであり、受部では外面にタテハケの後にヨコハケを施すもの（6）もある。

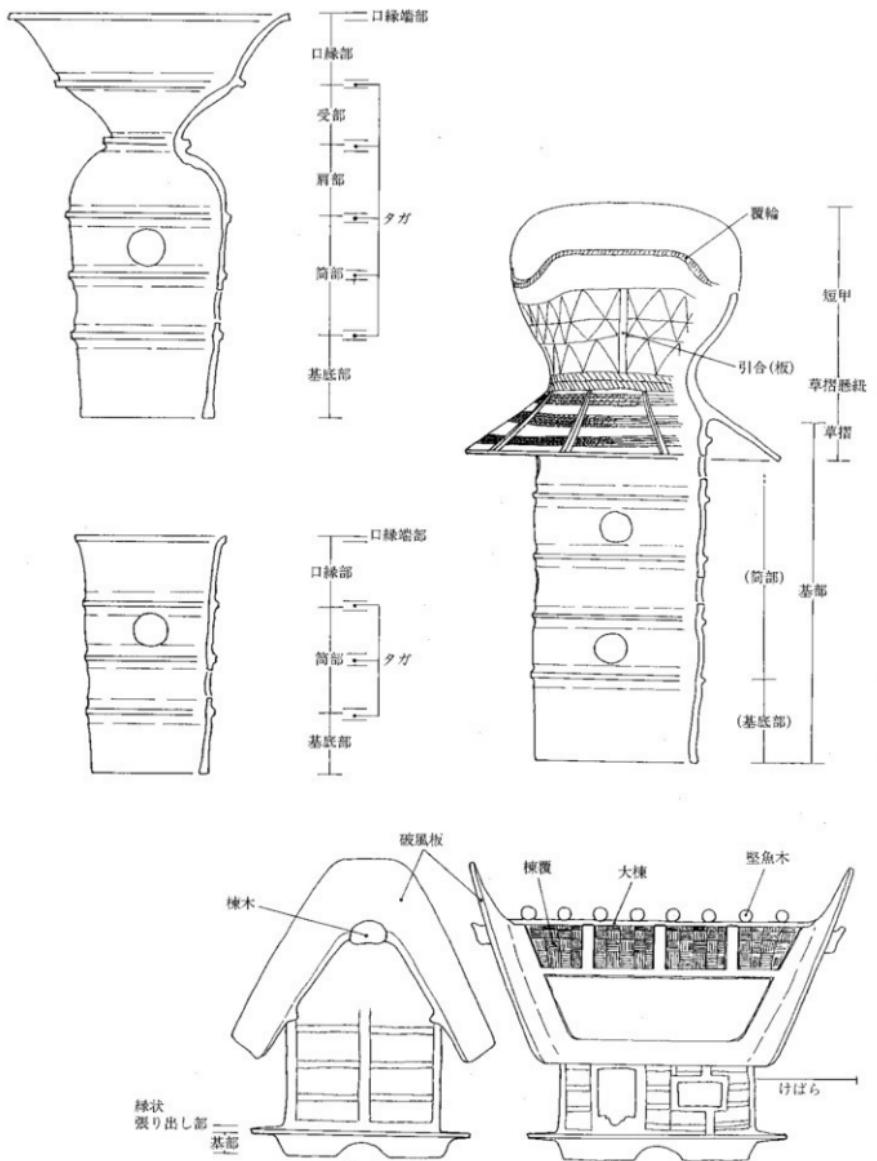
肩部は破片が少なく不明な点も多いが、5、7の破片から外面調整がタテハケから斜め方向のハケメの後にヨコハケを施しており、上半部の屈曲に近い部分では一次調整のタテハケから斜め方向のハケメを残していることがわかる。内面調整は斜め方向のハケメの後ナデを施しており、特にタガ裏面ではハケメが撫で消されている。

破片は小さいものが多く、径を復元するにはやや不十分であるが、1は口縁部～受部の破片のうちでは破片数も多く、各部分がそろっている。5、7の破片もハケメの特徴などは1の個体に近く同一個体である可能性もある。これらからやや強引ながら復元すると、口径88cm程度、口縁部高さ20cm程度、受部高さ17cm程度、筒部径33cm程度になると思われる。第12図上はこれらの破片から復元的に図化したものである。また、個体数は口縁部～受部の特徴から最低でも、1、4、6の3個体が存在する。

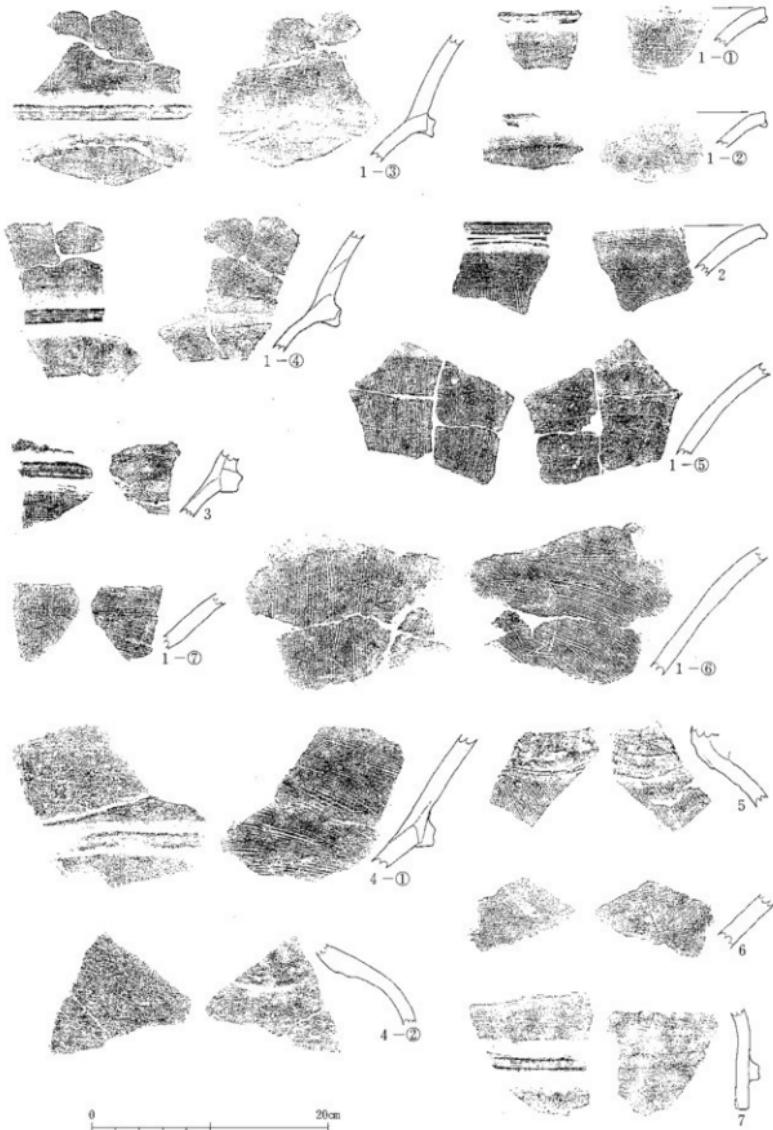
また、先に述べたように筒部～基底部の破片のうち15～17の破片は、焼成の特徴などから朝顔形埴輪である可能性がある。これらの破片から、外面調整はタテハケの後C種ヨコハケ、内面調整は縦方向から斜め方向のハケメが施される。内面のハケメは基底部では縦方向、筒部では斜め方向になっており、基底部から上に向かって縦→斜めの方向になっているものと思われる。

ii) 円筒埴輪・形象埴輪基部（第12図8、第13図、第14図）

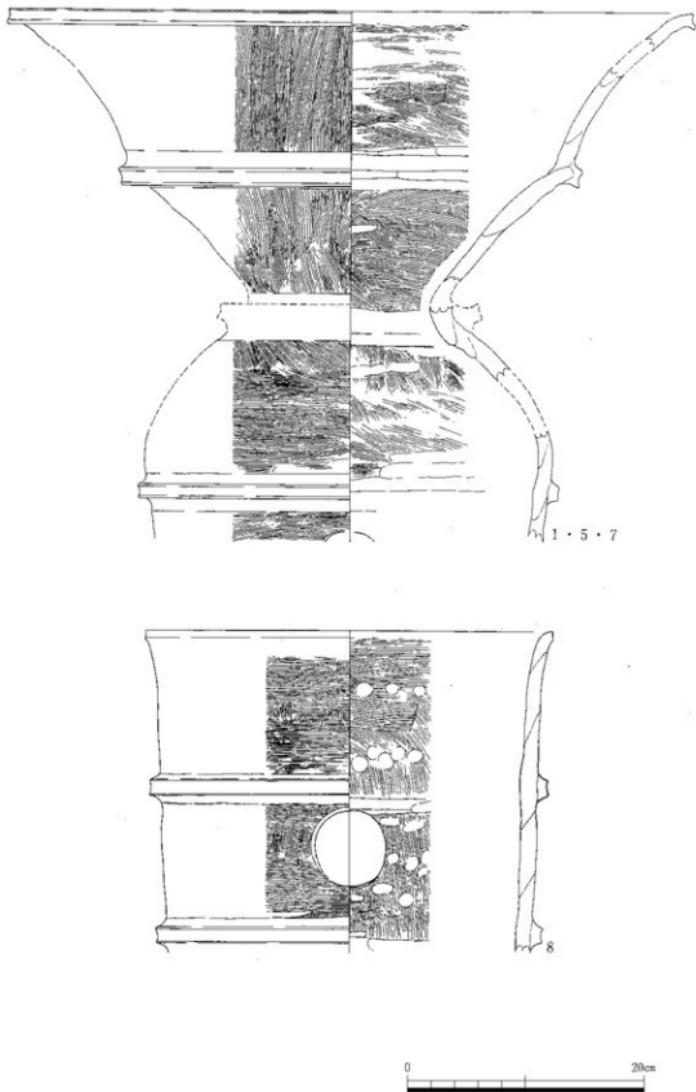
口縁部を除くと、朝顔形埴輪、円筒埴輪、形象埴輪基部を区別することは難しい。焼成や色調の特徴からみると、後に詳しく述べるが、須恵質のもの（焼成A）。やや硬質で10YR 8/3（浅黄橙色）を中心とする色調を呈するもの（焼成B）。軟質で5YR 6/6（橙色）を中心とする色調を呈するもの（焼成C）がある。先述のとおり焼成Aのものは朝顔形埴輪である可能性がある。



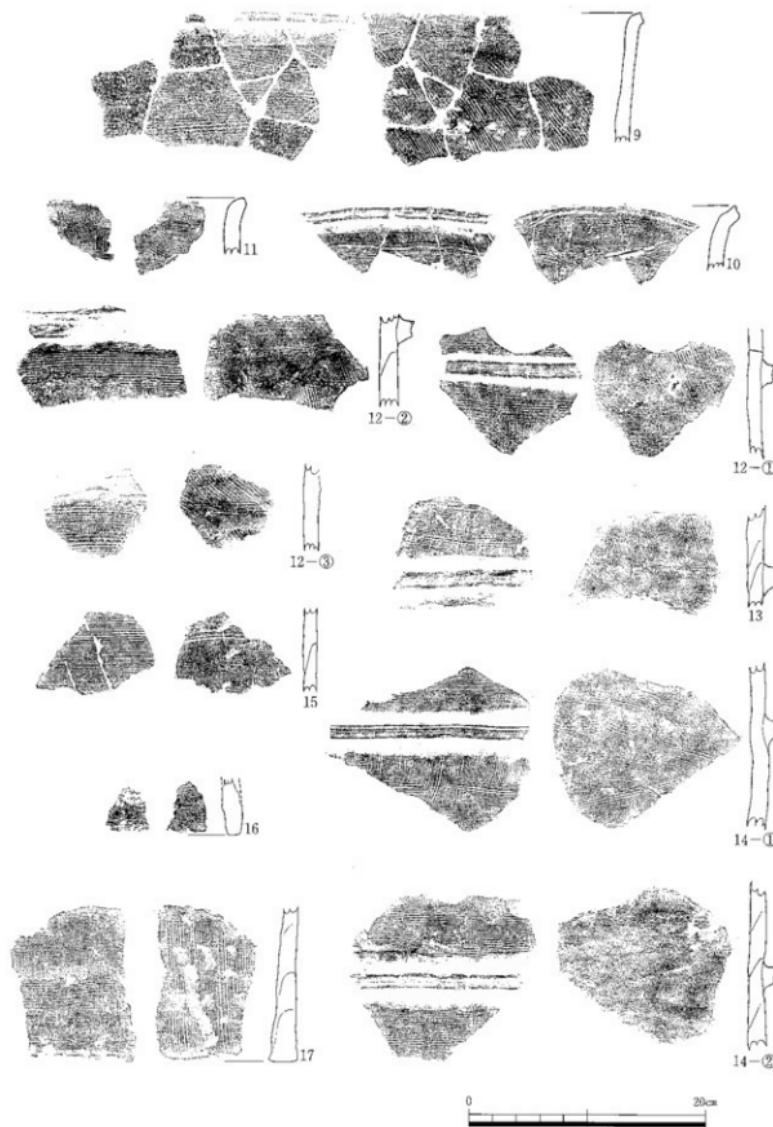
第10図 埴輪各部の呼称



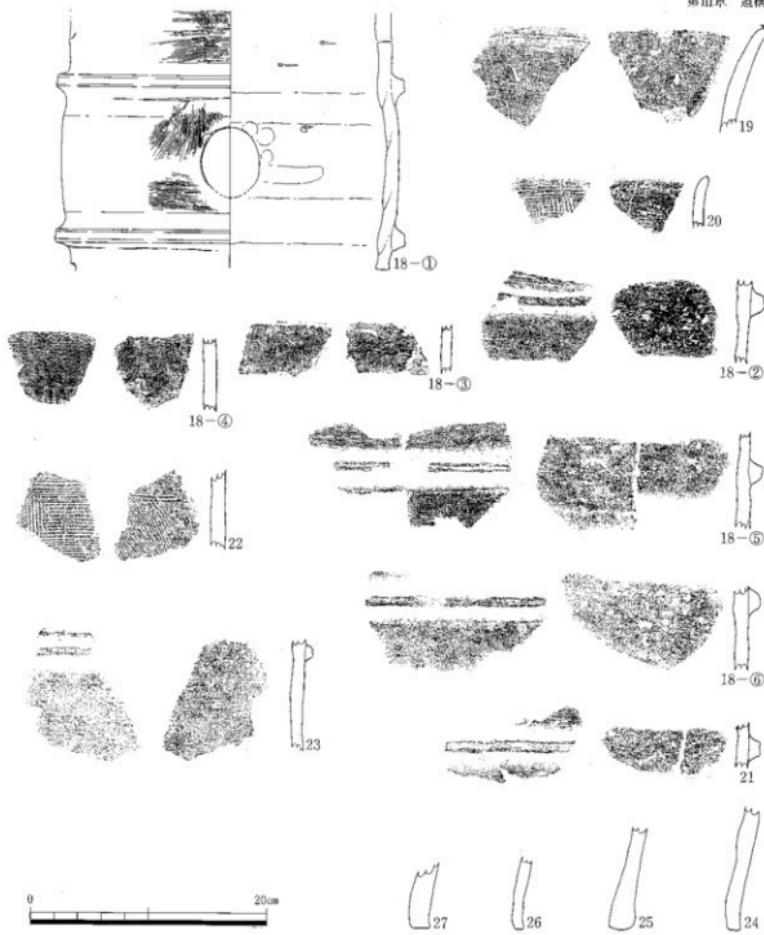
第11図 出土埴輪①(朝顔形)(S=1/4)



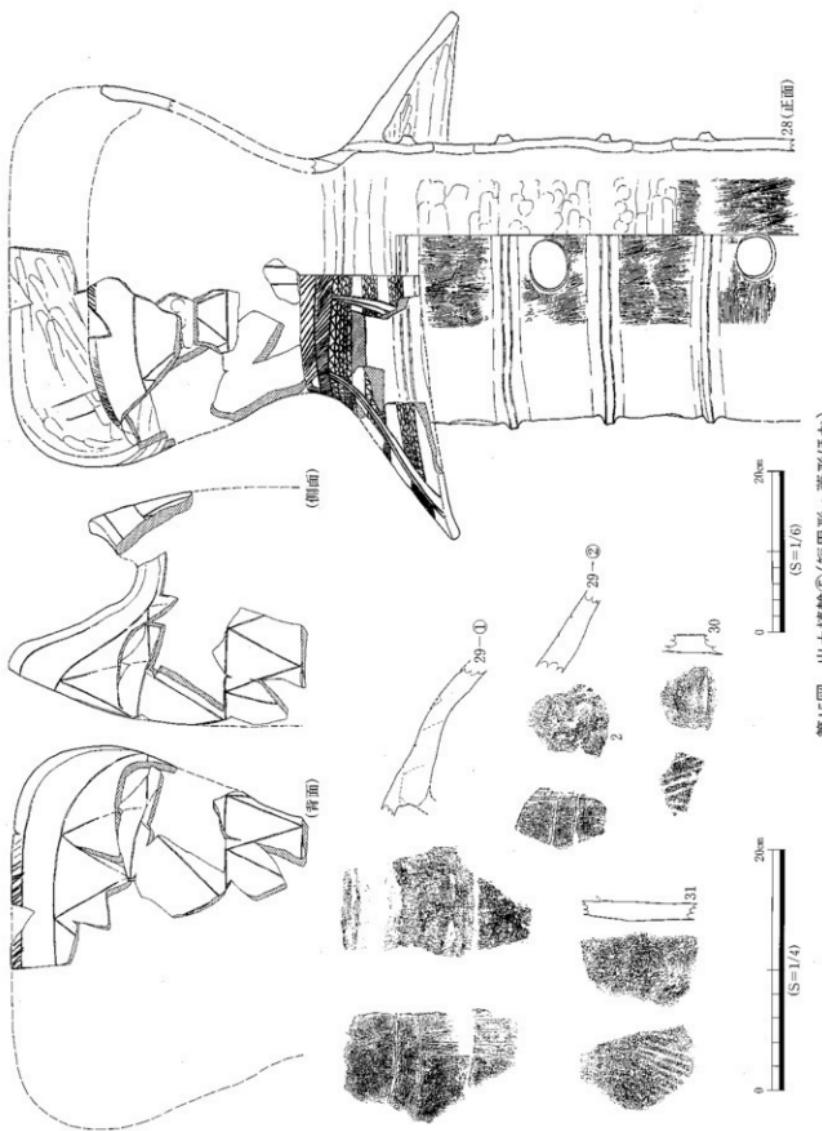
第12図 出土埴輪②(朝顔形・円筒)(S=1/4)



第13図 出土埴輪③(朝顔形・円筒)(S=1/4)

第14図 出土埴輪④(円筒・形象埴輪基部) ($S=1/4$)

口縁部は口縁端部が外反し、端面が外側を向くもの(8~11)、外反がわずかで、端部を丸く收めるものの(20)が存在する。19は口縁部に分類したが、他の口縁部片断とは異なり外に傾く形態であり、調整も外面のハケメが口縁端部に向かってやや放射状になっているよう、内面の調整もはっきりしないナデになっており、形象埴輪の一部などの可能性もある。口縁端部は内外面、端面にヨコナデを施し、上方につまみ出したようになっているもの(10)もある。20は口縁端部内面(上面)にナデによるものと思われる面があるものの、端部には明瞭なヨコナデが施されず丸く收めている。調整は外面がタテハケの後C種ヨコハケ、内面には斜め方向から横方向のハケメが施された後、上方ほど丁寧にナデが施される。8、9の内面には一部指頭圧痕を残されているほか、9には外面に記号状のヘラ描き沈線文が描かれている。



第15図 出土埴輪⑤(短甲形・蓋形ほか)

筒部では外面調整はタテハケの後C種ヨコハケが施されるものが大半であり、内面調整は斜め方向のハケメの後にタガの裏面など一部にナデが施される。外面調整としてはC種ヨコハケ以外に、12-②では明瞭な停止線をもたないもののハケメ原体を止めた痕跡が、14-②ではB種ヨコハケが認められる。また、焼成A・Bのものと焼成Cのものでは、調整、特にハケメの原体が異なっており、焼成A・Bのものは8本/cm程度であるのに対し、焼成Cのものは10~12本/cmの細かいハケメのもの(12)と4本/cmの粗いもの(22)があり、内面はナデを施すものが多い。ヨコハケの工具幅は広く、8の個体からすると8cm以上とみられ、タガ間1段を1回の動作で調整しているようである。8、12-①、18-①には円形の透かし孔があり、各段2孔づつ互い違いに穿孔されているようである。

基底部(24~27)は破片が少なく、朝顔形埴輪の項でとりあげた17を除くと風化が激しいため調整等は不明だが、直立するものやわずかに外に傾くもののが存在する。

径の復元できるものは多くないが、8は口縁部から筒部1段分のほぼ全周が残るもので、口径35.0cm、口縁部高さ13.0cm、筒部径31.0cm、タガ間高さ12.5cmを測る。14-①、14-②を復元すると筒部径30cm程度になると思われる。また、18-①は1/3周程度に接合する破片であり、筒部径28.6cmに復元される。焼成Cのものは、先述したように焼成の特徴だけでなく調整、特にハケメが、焼成A・Bのものと異なっている。また径も復元し得た18-①は筒部径28.6cmと、筒部径30cm強になると思われる焼成A・Bのものよりやや小形である。したがって、焼成Cのものには小型の円筒埴輪、形象埴輪基部などが含まれている可能性が考えられる。

なお、出土した個体数は口縁部や調整の特徴などから、特徴が大きく異なる19を除いて、最低でも8、9、10、11、18、20の6個体が存在する。またハケメの特徴などから、8と14、9と12は極めて類似しており同一個体の可能性がある。

b、形象埴輪

i) 短甲形埴輪 (第15図28)

4段以上の基部に草摺と短甲がのる形態であり、草摺は一体に作られている。短甲部分は三角板の表現があり、革縫、あるいは鉄留の表現は省略されている。鉄留のものは鉄の表現を省略する傾向にあるとみられることからすると、三角板鉄留短甲を模したものと考えてよいであろう。草摺は革製の草摺を模したものである。

短甲部分は草摺以下と比べ破片が少なく風化も激しい。復元的にみると、前胴高26.5cm、後胴高36.7cm、長幅47.4cm、短幅29.6cmとなる。上端部に覆輪の表現である短い斜線文を施し、無文部分を挟んで三角板の表現である山形文を界線を挟んで3段施している。前胴中央には引合板を表す2条の縱方向の沈線が存在するようである。

短甲と草摺の間が草摺懸紐の表現とみられる幅広の斜線文を2段施している。懸紐部分を含む草摺部分は高さ15~20cm、懸紐部径29.0cm、草摺下端径65.4cmを測る。草摺部分には3本1組の放射状沈線と無文帯を挟んで、5~6列1組の山形文帯を3段巡らせる。

基部は現状で4段が残っており、2孔づつの円形透かし孔を各段互い違いに穿孔している。径は35.1cmで、現状で最上部のタガ上端までの高さは50cmを測る。

調整は短甲部分、草摺部分の外面は基本的にナデで、基部の外面は二次調整が省略されたタテハケであり、最下段のみ二次調整のC種ヨコハケを施している。ハケメは6~8本/cm、焼成Bの円筒埴輪のハケメに比べ線が細いものである。内面はナデ単位の凹凸が残る強いナデで、短甲部分内面には指頭圧

痕を残す部分、基部最下段内面には縦方向のハケメがそれぞれ認められる。

胎土は1mm以下の長石・石英粒を多く含み、1~3mm大の赤褐色粒をまばらに含む。焼成は黒斑をもつ焼成Dである。

ii) 蓋形埴輪（第15図29）

29-①、29-②は蓋形埴輪笠部の破片と考えられる。29-①は横方向の2条の平行沈線の下に4条の放射状沈線が施されている。29-②は笠部下半部を2段に分ける界線と思われる2条の横方向の平行沈線に交差して、2条以上の放射状沈線が施されているとみられる。29-①の内面に基部との接合部があり、器壁の厚さからも29-②のほうが笠部下端に近い破片と思われる。そうだとすると、笠部下半部がかなり長いものとなり、蓋形埴輪の笠部としてはやや不自然な感も否めない。29-②の下端は割れ口となっているが、笠端部にほど近い部分であり、2条の平行沈線も笠部下半部を2段に分ける界線ではなく笠端部に沿うものもある。調整は外面がハケメの後に丁寧なナデを施しており、内面ははっきりしないがナデのようである。

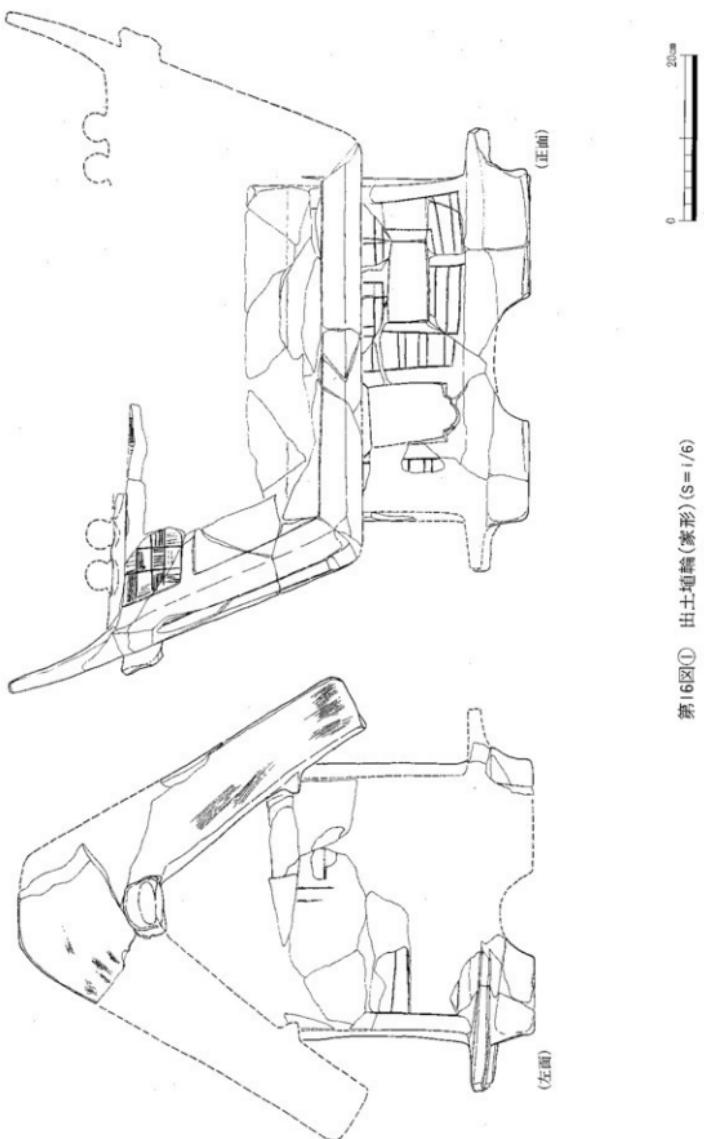
胎土は1mm以下の長石粒、1~3mm大の石英・赤褐色粒をやや多く含むものであり、焼成は7.5YR 8/7（浅黄橙色）を呈する均質なもので、黒斑も認められず焼成B、窯窯焼成の製品と判断される。

29-②の平行沈線の解釈により復元される文様や形態に差ができるが、放射状沈線が4条であること、笠部下半部の界線あるいは笠端部に沿う沈線が2条あることなどは、畿内の典型的な蓋形埴輪には認められない文様であり、在地色の強い個体と思われる。また、破片のため正確に大きさを復元し得ないが、笠部中央の沈線の円弧からみる限りかなり大形のものになるようである。周辺の古墳では造山古墳¹⁰、作山古墳¹¹、小造山古墳¹²、宿寺山古墳¹³、江崎4号墳付近¹⁴などに蓋形埴輪の存在が知られている。このうち江崎4号墳付近例は放射状沈線を欠くものの、笠端部に2条の平行沈線を巡らせ、その外側に縦方向の短い沈線を並べるものであり、29-②の平行沈線が笠端部に沿うものであれば、その類例としてあげられる。編年的な位置付けとしては、松木武彦の蓋形埴輪編年にしては、畿内色が強く「津堂城山タ イプ（新相）」に位置付けられる造山古墳例に比べかなり簡略化した印象を受け、また笠部中央の突帯が2条の平行沈線に置き換わっているなどの特徴から「はさみ山タイプ」の蓋形埴輪との関連を考えられる。

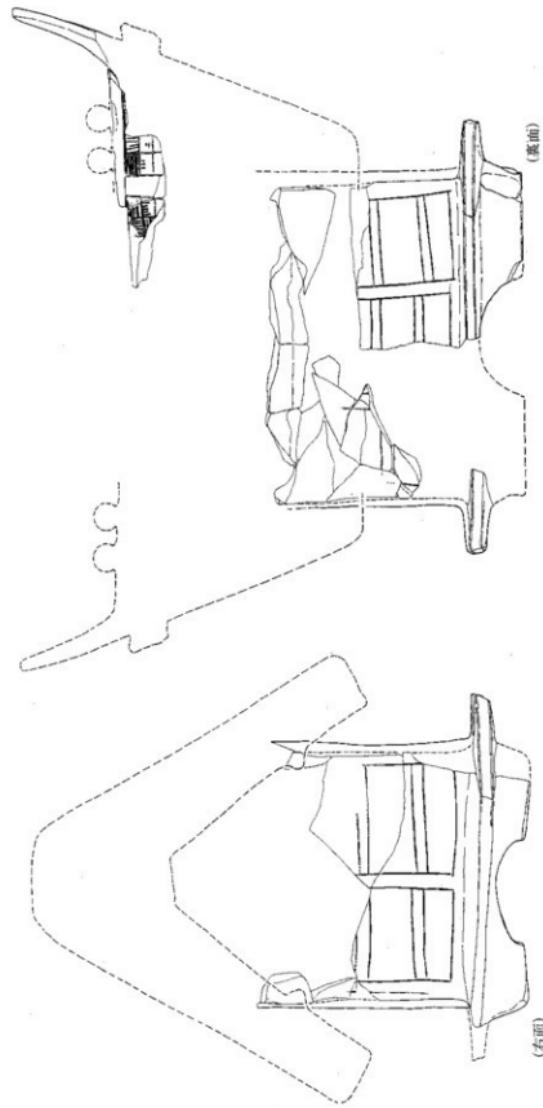
iii) 家形埴輪（第16図）

家形埴輪は切妻造平入、桁行3間、梁間2間の構造だが、入口や窓の配置からより大規模な建物を模したものと思われる。屋根部分、本体部分は直接接合しないが、別の個体と思われる家形埴輪片も存在しないので、同一個体と考えて差し支えないものと思われる。ここでは便宜的に、屋根部分は残存部分の多いほうを、本体部分は入口、窓の表現があるほうを正面として記述をすすめる。

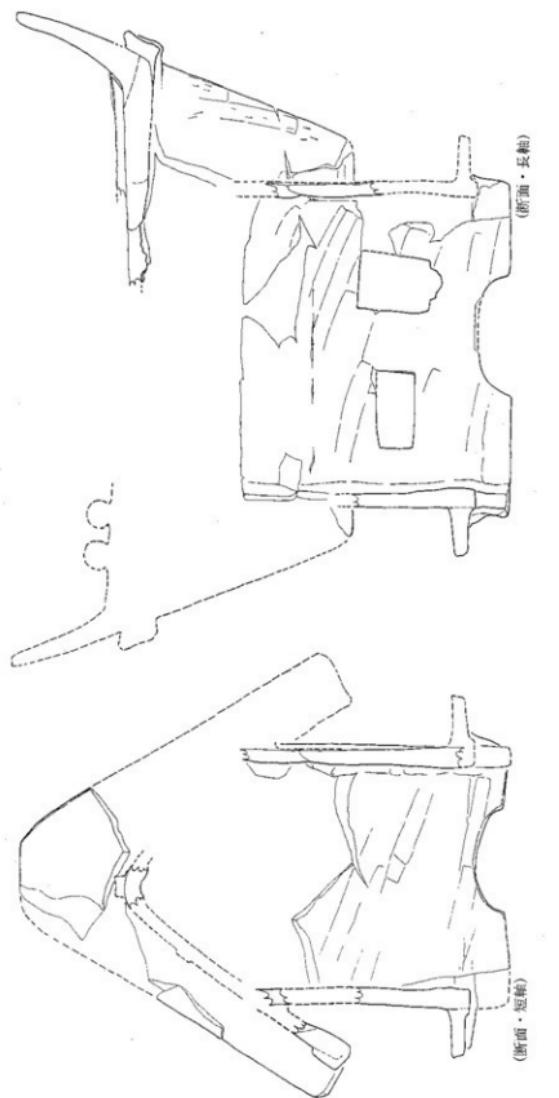
屋根は正面の左側の「けばら」部分から軒端部のほぼすべて、棟の一部が残存しており、正面の屋根中央部から右側にかけてと背面側はほとんど破片が存在しない。本体は正面、右側面、背面の壁体はよく残っているが、左側面は残存部が少なく、また右側面、左側面とも壁体上部-屋根に挟まれる部分-を欠いている。縁状の張り出し部も正面、左側面、背面の一部のものは欠如している。右側面、背面、破風板面、器体内面などは器面の残りもよく、破風板下面や軒下面には赤色顔料も残存しているが、屋根などの上向きの面、特に破風板上面、大棟などでは風化が激しい。本体正面及び背面の上部、左側面などは器面の剥離が激しく、文様も読み取れない。法量は本体の縁状の張り出し部を除く平側幅41.0cm、妻側幅33.0cm、縁状の張り出し部幅5.8cm、基部の高さ5.0cm、屋根との接合痕の下端までの高さ約29.5cmを測る。本体と屋根とは直接接合しないので、本体の接合痕などを手掛かりに全体形を復元すると、



第16図① 出土埴輪(家形) ($S = 1/6$)



第16図(2) 出土埴輪(家形) ($S = 1/6$)



第16図③ 出土埴輪(家形)($S = 1/6$)

最大高—破風板上端までの高さ—62.7cm、棟までの高さ約50cm、平側最大幅80.8cm、妻側最大幅55.0cm程度になると思われる。

屋根は「けばら」が外側に大きく「転ぶ」形態であり、軒下面と破風板面とは約110°の角度をなす。破風板は幅7~12cmで頂部ほど幅が広くなっている。頂部の下側には断面半円形の棟木を貼り付けている。また、「けばら」内面には本体との接合部を支持するものと思われる三角錐状の粘土を貼り付けている。これは同時に桁の端部を表現したものもある。屋根の傾斜は約55°であり、大棟には棟覆の網代の表現がある。大棟上には高さ約1.5cm、幅約2.0cmの断面方形の突帯を貼り付けており、その上面には、風化のため不明瞭になっているが、2~3cm間隔で堅魚木の脱落痕が認められる。

本体は桁行3間、梁間2間で正面には入口と窓が穿けられている。柱などは平行沈線で表現されており、柱間は板壁の表現かと思われる2条1組の平行沈線を数段描いている。正面は左よりに入口、右よりに窓があるが、入口中央上、窓左辺上、窓中央上、窓右より下に柱と思われる縱方向の2条の平行沈線が描かれている。建物の構造上、柱を切って入口や窓があるとは考えられないので、これはかなりディフォルメされた表現と考えられ、より大規模な建物をモデルにしたものと思われる。入口は10cm×7cmの縦に長い長方形で、下辺に一段段差をつけ、さらに半円形の抉り込みを設けている。入口の周囲は沈線で取り囲まれており、上辺の左右の角には周囲の沈線の角とを結ぶ対角線状の沈線が描かれている。下辺の段・抉り込みや周囲の沈線などの表現は他遺跡出土の家形埴輪にも認められるものであり、実際の入口の構造を表現したものと思われる。なお、扉は伴っていないようである。窓は4.5cm×9.5cmの横に長い長方形で、やはり周囲は沈線で囲まれているが、対角線状の沈線はちょうど割れ目になっているため確認できない。

外面の調整は破風板面に8~9本/cmのハケメが残存しており、ハケメの後丁寧なナデが施されているものと思われる。内面はヘラや板状の工具などによる粘土搔き出し痕、あるいは強いナデで、幅3cm程度の調整単位が観察できる。大棟部内面の中央付近は未調整であり、粘土紐の凹凸がそのまま残っており、成形時にこの部分を最後にふさいだことがわかる。本体部分は高さ25cm程度の粘土板を組み合わせて形成られており、この段階で入口、窓の穿孔などある程度調整された後に上の屋根部分などが形成されているようである。なお、先に触れたように、破風板面、「けばら」内面、軒下面などに赤色顔料が残存しており、もとは全面に赤色顔料が塗布されていたものと思われる。

胎土は他の埴輪類と基本的に同じであるが、屋根部分と本体部分では含有物の量などに若干差があるようみえるが、風化の程度の差であるかもしれない。本体部分の胎土は1mm以下~2mm程度の長石・石英粒、1~3mm大の赤褐色粒を含むものであるが、比較的含有量が少なく肌理が細かい印象をうける。それに対し、屋根部分では1mm以下~3mm大の石英・長石粒を多く含むものである。色調は外面が7.5YR 8/3(浅黄橙色)~2.5YR 7/6(橙色)、内面が5YR 6/6(橙色)である。焼成は黒斑も認められず焼成Cに近いが、かなり軟質であり、破片の断面や屋根等の接合が剥離した面などは黒灰色を呈しており、野焼きの製品か焼けのあまい窑窯焼成のものか判断が難しい。

県下の家形埴輪の出土例としては月の輪古墳³⁰、金蔵山古墳³¹、法蓮37号墳³²、高本古墳群³³などがあげられるが、本例は表現など造山古墳出土例³⁴に類似している。造山古墳例は屋根の「けばら」部分から破風板にかけての破片であり、本例同様切妻造りの家形埴輪のものと思われる。しかし、造山古墳例は大棟部分に棟覆の網代の表現がないなど本例と異なる特徴もある。

iv) 形象埴輪片 (第15図30、31)

30、31は外面に複数の沈線が認められ、形象埴輪の一部と考えられる。いずれも外面の風化は激しく、

破片の向きなども不明だが、胎土や調整、破片の状態などは両者とも類似しており同一個体の可能性もある。30は左上がり（？）の沈線4条とそれに鋭角に取り付く沈線2条、31は右上がり（？）の沈線群が認められ、その上にタガ状のものや接合部分の剥離した痕跡が存在する。内面の調整はナデ、あるいはヘラ状工具によるナデ様の調整で、胎土や調整は上記の家形埴輪のものに類似する。小破片であるためどのような形象埴輪かは不明であるが、30は家形埴輪の一部である可能性もある。家形埴輪の残存部分にはこれらと共通する文様部分は存在しないが、破片の残存しない妻側上部の屋根に挟まれた部分には、高本古墳群例など他の壁体と異なる文様が施される例があり¹⁰、これがその部分である可能性も考えられる。文様としては、斜線文を組み合わせた文様は宿寺山古墳出土の不明形象埴輪¹¹にもみられる。一方、31は円筒埴輪部のようなやや弧を呈する破片であり、家形埴輪以外の形象埴輪と考えられる。

c. 胎土・焼成の特徴

埴輪類の胎土は長石・石英の粒子の大きさや含有量などに若干の違いがあるものの、おおむね共通する胎土とすることができる。微細な長石粒を多く含むことが特徴であり、1~3mm大石英粒・赤褐色~黒灰色の粒子を含んでいる。

焼成は先述のように、

焼成A・・・青灰色から灰黄褐色の色調を呈し、堅緻なもの。いわゆる須恵質のもの。

焼成B・・・10YR 8/3（浅黄橙色）を中心とする色調で、やや軟質、均質な焼成のもの。

焼成C・・・5YR 6/6（橙色）を中心とする色調で軟質のもの。黒斑は認められない。

焼成D・・・軟質で、明らかな黒斑をもつもの。

と外見的には4種存在している。

このうち、焼成A、焼成Bは同一個体と思われるものにも両者がみられ、また中間的なものも存在することから、単に焼け具合の差であることがわかる。焼成A、焼成Bは朝顔形埴輪、円筒埴輪、蓋形埴輪などにみられ、窯窯焼成によるものと判断される。焼成Cは円筒埴輪あるいは形象埴輪基部としたものに特徴的である。家形埴輪は色調や、軟質だが黒斑は認められないという点では焼成Cに類似する。しかし、器壁内部、特に屋根の接合部分など厚手な部分などに黒灰色部分があるなどやや不均質な焼け具合を示しており判断が難しい。焼成Dには短甲形埴輪があり野焼きの製品と判断される。しかし、黒斑部分以外では焼成Cと区別することは困難である。焼成Cに関しては窯窯焼成か野焼きか判断が難しいが、焼成Cに分類される一箱分の破片中黒斑をもつものは1点もなく、均質な焼けを示すことから窯窯焼成である可能性が高いように思われる。

d.まとめ

i) 造山第4号古墳出土埴輪の特徴

造山第4号古墳では、限られた調査面積ながら、また第4号古墳との関係が推定にとどまっている段階であるとはいえ、朝顔形埴輪3個体以上、円筒埴輪5個体以上、短甲形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪などの存在が明らかになった。

朝顔形埴輪は口径88cm、筒部径33cm程度に復元され、全形は不明ながら肩部より下が基底部を含め3段であるとすると、高さ1m程度になるものと思われる。円筒埴輪は8の個体で口径35.0cm、筒部31.0cmを測り、口縁部、基底部を含め4段とすると高さ60cm程度になる。また、焼成Cとした円筒埴輪は筒部径30cm弱のやや小型のものになると思われる。

外面の二次調整はB種ヨコハケも認められるが、大半はC種ヨコハケであり、工具幅はほぼタガ間に達するものと思われる。内面の調整は縦方向から斜め方向、横方向のハケメのものと、それをナデ消したものとが存在する。基底部では調整まで観察できるものが少ないが、17の破片では外面の二次調整は省略せずC種ヨコハケが施されており、内面調整は縦方向のハケメである。また、焼成Cのものは内面調整にナデを施す傾向が高いようである。

以上のように、筒部内面では縦方向、斜め方向、横方向のハケメが認められるのに対し、基底部内面では、1点だけではあるが、縦方向のハケメであることから、内面のハケメは基底部から上に向かって縦→斜め、横方向になっているものと思われる。また、ナデも基底部内面ではほとんど施されないので対し、横方向に近いハケメの部分ほどナデの頻度が高いうると思われる。これらは筒部の内に半乾燥工程を挟むような工程的な間隔があることを示していると思われ、その境界部分に近い部分、すなわち成形段階において上端に近い部分に横方向に近いハケメとナデが施されているものと思われる。

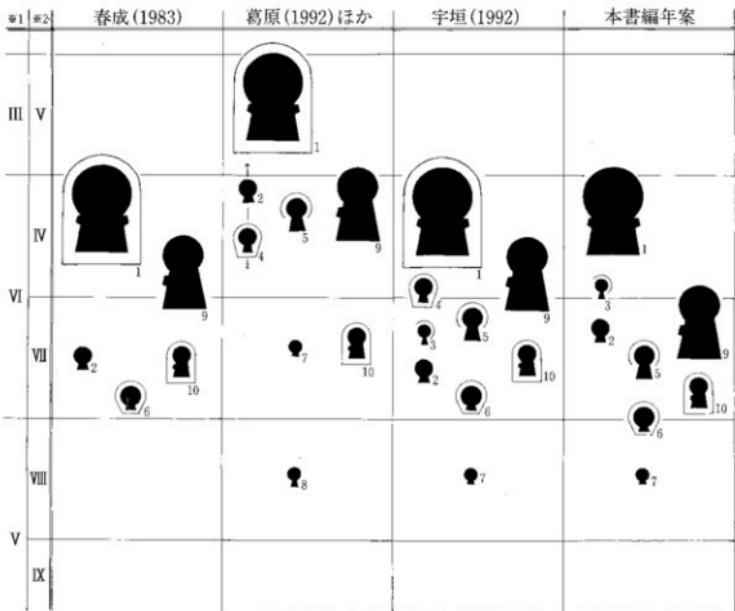
形態的特徴は、円筒埴輪の口縁部は口縁端部がわずかに外反する形態であり、口縁部が直立するもの、口縁端部外面にタガ状の粘土帯を貼り付けるものなどは含まれない。タガは断面台形が、ナデにより「M」状になるものが多い。

焼成は短甲形埴輪を除き黒斑は認められず窯窯焼成と考えられる。しかし、無黒斑のものでも焼成A・Bとしたものと焼成Cとしたものは焼成や色調だけでなく、調整、特にハケメの特徴も異なっており、朝顔形・円筒埴輪と小型の円筒埴輪など、あるいは朝顔形・円筒埴輪と形象埴輪といった器種の違いも予想される。また、焼成Dすなわち黒斑のある短甲形埴輪も基部外面の二次調整のヨコハケを、現状の最下段を除き、省略するなど他の器種のものと異なる特徴をもつ。こうした差異は出土個体数も少ないため、単に個体差に近いものである可能性もあるが、焼成や調整の異なるものが異なる供給源からもたらされたことを示していることが予想される。周辺の古墳においても、野焼きのものと窯窯焼成のものが混在する状況が指摘されており、宇垣匡雅はこうした状況を吉備における窯窯焼成技術の導入期の状況として評価している¹⁰⁰。今回、他の古墳出土資料について観察、検討することができなかつたため確かにすることは言えないが、第4号古墳と同様の状況が認められるとするならば、このような混在状況はおそらく器種にある程度対応した分業的な複数の工人集団による埴輪生産、供給の結果である可能性がある。

ii) 造山第4号古墳出土埴輪の位置付け

以上の特徴、特に外面調整はB種ヨコハケを少量含むものの大半はC種ヨコハケであり、窯窯焼成と判断されることから、第4号古墳出土埴輪は川西編年のIV期に位置付けられる。また、口縁部は外反しており、基底部外面のヨコハケも省略されておらず、口縁部も外反するものしか存在しないことからIV期でも前半に収まるものと思われる。それでは周囲の古墳出土の埴輪と比較した場合はどうであろうか。

造山古墳、作山古墳を中心とする古墳出土埴輪の位置付けに関しては諸説あり、特に造山古墳の位置付けに関しては説によっては四半世紀あまりの差がある。これは主に野焼きの埴輪と窯窯焼成のものが混在する状況をどのように解釈するかによっている。春成秀爾は窯窯焼成の埴輪の存在を指摘し、造山古墳の築造を窯窯導入以降の430~440年前後と考える¹⁰¹。また宇垣匡雅も野焼きと窯窯焼成の埴輪の共存は吉備における窯窯焼成技術導入期の一般的な状況と考え、IV期の古い段階の築造としている¹⁰²。一方、葛原克人は窯窯焼成の埴輪は副次的なものと考え、築造時期を窯窯導入以前、10期編年のV期、5世紀第1四半期とする¹⁰³。造山古墳の埴輪は春成の報告によれば、「多くは埴質のようで、黒斑をもつ破片も含まれて」おり、確実な窯窯焼成のものも存在する。外面調整はB種ヨコハケ、C種ヨコハケがあり、



第17図 造山古墳周辺の中期古墳編年との対比

わずかではあるがA種ヨコハケも存在するという。造山古墳の埴輪は表採によるものであり、当然、円筒埴輪と朝顔形埴輪、形象埴輪の基部を区別することは難しい。第4号古墳の状況からすると、多様な焼成や調整の存在は時期の異なる埴輪が混在しているというばかりでなく、器種によってそうした特徴がとなる可能性も十分考えられる。したがって造山古墳の埴丘全体に分布するという窯窓焼成の埴輪をすべて副次的なものとして評価することは難しいと思われる。また、宇垣匡雅は野焼きのものと窯窓焼成のものの比率からその先後関係を考えるが、先述のような埴輪の供給体制からすると、勿論全体としては窯窓焼成の比率が高くなっていくのは当然だが、特に中小古墳の場合造山古墳のような大古墳とその比率を単純に比較できるとは思われない。従って、ここでは調整や形態的な特徴を重視して比較することとする。

造山古墳出土埴輪²⁵は外面の二次調整がB種、C種ヨコハケで、1段につき2回程度の動作でヨコハケが施されているようである。タガの突出度も高く、基底部の二次調整も省略されていない。口縁部の破片は公表されておらずその特徴は不明だが、以上の特徴から造山古墳のものが第4号古墳のものに先行するものであることは疑いないと思われる。

作山古墳出土埴輪²⁶はタガの突出はやや高いものの、口縁部が直立するもののが存在し、基底部の外面調整もヨコハケを省略するものが認められるなどやや新しい特徴をもっており、川西編年IV期でも後半に位置付けられる。

榛山古墳出土埴輪²⁷は完形品1点が報告されており、口径32cm、底径24cm、高50cmを測る。外面調整は

C種ヨコハケで基底部では省略されている。口縁端部は「く」字に外反しており、タガ間は10cm程度である。作山古墳とはほぼ同時期と思われる。

小造山古墳出土埴輪のヨコハケはB種及びC種である。1段につき1回の動作でヨコハケを施しているが、第4号古墳のものに比べタガ間が狭くなってしまっており、やはり新しい特徴と考えられる。川西編年IV期の後半、作山古墳にやや遅れる時期に位置付けられるであろう。

折敷山古墳出土埴輪⁵⁸は全形のわかるもの、径が復元されているものは径28cm程度の小型のものであり、黒斑が認められるものが存在する。外面のヨコハケはB種及びC種のようであり、工具幅は広く8cmを測る。タガは高く、工具幅などから造山古墳例にやや遅れるものと思われる。第4号古墳との先後関係は難しいが、タガの突出度や三角板革綴短甲を模したと思われる短甲形埴輪が出土していることから、第4号古墳に先行するとしておく。

以上から造山第4号古墳出土埴輪は造山古墳、折敷山古墳に後出し、作山古墳、榎山古墳に先行する位置付けが与えられる。造山古墳は窯窓焼成の埴輪の存在、調整やタガの形状から川西編年IV期前半の早い時期に位置付けられるものと考える。

註

- (1) 村上幸雄・前角和男 1993 「付載1 折敷山古墳の調査」『折敷山遺跡・雲上山11号墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告10
- (2) 春成秀爾 1983 「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』
- (3) 註(2)文献
村上幸雄・前角和男 1993 「付載3 周辺古墳出土の埴輪について」『折敷山遺跡・雲上山11号墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告10
- (4) 村上幸雄・前角和男 1993 「付載2 小造山古墳の埴輪について」『折敷山遺跡・雲上山11号墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告10
- (5) 註(3)文献
- (6) 岡山大学考古学研究部 1976 「三須丘陵遺跡分布調査報告」
- (7) 松木武彦 1994 「吉備の蓋形埴輪—器財埴輪の地域性研究に関する予察」『古代吉備』第16集
- (8) 近藤義郎ほか 1960 「月の輪古墳」
- (9) 西谷真治・鍊木義昌 1959 「金蔵山古墳」
- (10) 村上幸雄 1985 「法蓮古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告2』
- (11) 谷山雅彦 1986 「高本古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告3』
- (12) 註(2)文献
- (13) 註(1)文献
- (14) 註(3)文献
- (15) 宇垣匡雅 1992 「吉備の中期古墳の動態—使用石材の検討から—」『考古学研究』第39卷第3号
- (16) 註(2)文献
- (17) 註(5)文献
- (18) 萩原克人 1992 「造山古墳とその時代」『吉備の考古学的研究』(下)
- (19) 例えば、折敷山古墳では黒斑のある円筒埴輪などが出土しているが、調整、特にヨコハケの幅は造山古墳のものよりも幅広くなってしまっており、造山古墳に先行するものとは思われない。これは、造山古墳の埴輪が窯窓導入以前であることを見しているのではなく、折敷山古墳の埴輪が小型のものが大半を占めるためと思われる。
- (20) 註(2)文献
- (21) 註(2)、(3)文献
- (22) 鳥崎東 1982 「備中榎山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』3
- (23) 註(4)文献
- (24) 註(1)文献

表2 出土埴輪観察表（朝顔形・円筒ほか）

番号	器種	部位	法量(cm)	測定	粘 土	色 製	備考
1-①	銅瓶形	口縁部端部	-	外面:タテハケ(9本/cm)後、端部側ヨコナデ口縁部ヨコナデ 内面:横方向ハケ後、ヨコナデ	1mm以下の長石、石英粒を多く含む。1~2mmの大暈赤色粒をまれに含む。	外面:7.5YR8/4(浅黄橙) 内面:7.5YR8/3(浅黄橙)	焼成B
1-②	"	"	-	外面:タテハケ(9本/cm)後、端部側ヨコナデ口縁部ヨコナデ 内面:横方向ナナメ方向ハケ後、ヨコナデ	1mm以下の長石、石英粒が多い。1~2mmの大暈赤色粒をまれに含む。	外面:7.5YR8/6(褐) 内面:7.5YR8/6(浅黄橙)	焼成B
1-③	"	口縁部～受部	タガ部径:22.5 タガ(上底):1.4 (下底):1.9 (高さ):1.5	外面:タテハケ(9本/cm)後、タガ周辺ヨコナデ、タガ端部ヨコナデ 内面:横方向ナナメ方向ハケ(8本/cm)後、タガ裏面ヨコナデ	1mm以下の長石を多く含む。石英粒は目立たない。1~2mmの大赤褐色粒をまれに含む。	外面:7.5YR7/3(にい程) -7.5YR6/1(褐灰) 内面:7.5YR6/6(程) -7.5YR7/4(にい程)	焼成A
1-④	"	"	タガ(上底):1.5 (下底):2.2 (高さ):1.6	外面:タテハケ(9本/cm)後、タガ周辺ヨコナデ、タガ端部ヨコナデ 内面:横方向ナナメ方向ハケ(8~9本/cm)後、タガ裏面ヨコナデ	1mm以下の長石粒を多く含む。1~2mmの大赤褐色粒をまれに含む。	外面:7.5YR7/6(褐) -5YR8/4(にい程) 内面:7.5YR7/6(想)	焼成B、受部外に赤色施釉料？残存
1-⑤	"	受部	-	外面:タテハケ(9本/cm)後、破片上端部にヨコナデ 内面:横方向ナナメ方向ハケ(8本/cm)後、ナダ、破片上部ほどハケメが残っている。	1mm以下の長石、石英粒を多く含む。2mmの大暈赤色粒をまばらに含む。	外面:7.5YR7/6(程) -7.5YR7/1(明褐灰) 内面:8.75YR8/4(浅黄橙)	焼成B
1-⑥	"	受部？	-	外面:タテハケ(6~7本/cm、幅4cm以上)後、破片上端部にヨコナデ 内面:横方向ナナメ方向ハケ(7本/cm)後、破片上方にナダ	1mm以下の長石を比較的多く含む。	外面:10YR8/4(浅黄橙) 内面:7.5YR7/4(にい程)	焼成B
1-⑦	"	口縁部あるいは受部	-	外面:タテハケ(8~9本/cm) 内面:横方向ナダ(6~7本/cm)後、ナダ	1mm以下の長石、石英粒を多く含む。2mmの大暈赤色粒をまばらに含む。	外面:7.5YR8/4(浅黄橙) 内面:7.5YR7/2(にい程) -10YR7/2(にい黄橙)	焼成B
2	"	口縁部端部	-	外面:タテハケ(7本/cm)後、端部側ヨコナデ 内面:横方向ナナメ方向ハケ(7本/cm)後、ナダ	1mm以下の長石粒を含む。	外面:5YR8/4(にい程) 内面:5YR7/4(にい程)	焼成A
3	"	受部	タガ(下底):2.2 (上底):1.1 (高さ):1.0	外面:タテハケ(8本/cm)後、タガ周辺ヨコナデ、口縁部ヨコナデ 内面:横方向ナナメ方向ハケ、タガ裏面より上方ナダ	1mm以下の長石、石英粒を多く含む。暗赤色、灰黒色粒をまれに含む。	外面:10YR7/2 (にい黄橙) 内面:8.75YR7/4 (にい程)	焼成B
4-①	"	口縁部～受部	タガ(下底):2.5 (上底):1.0 (高さ):1.3	外面:風化のため不明 内面:横方向ハケ(5本/cm)後ナダ	1mm以下の石英、長石粒をやや多く含む。	外面:7.5YR8/4(浅黄橙) 内面:10YR7/4 (にい黄橙)	焼成B、タガ裏面に赤色施釉料残存。
4-②	"	肩部	-	外面:調整不良。ハケメの痕跡がわずかに残る。 内面:ケズりあるいは強いナダ?砂粒移動感。	1mm以下の長石、石英粒を多量に含む。1~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面:7.5YR8/4(浅黄橙) 内面:7.5YR7/6(想)	焼成B
5	"	"	-	外面:ナナメ方向ハケ(6~7本/cm)後、タガ周辺ヨコナデ 内面:ナナメ方向ハケ(7本/cm)後、タガ裏面より上方ナダ	1mm以下の石英、長石粒多い。2mmの大赤褐色粒をまれに含む。	外面:7.5YR7/4(にい程) 内面:7.5YR7/6(想)	焼成B、タガ剥落
6	"	受部？	-	外面:タテハケ後ヨコハケ(7~8本/cm) 内面:横方向ナナメ方向ハケ(7本/cm)後ナダ?	1mmの大石英、長石粒を多く含む。	外面:10YR8/4(浅黄橙) 内面:7.5YR8/4(浅黄橙)	焼成B
7	"	肩部～筒部	タガ(下底):2.0 (上底):1.2 (高さ):10.9	外面:ヨコハケ(C種・8本/cm)、タガ周辺はヨコナデ 内面:ナナメ方向ハケのちナダ。タガ裏面周辺はナダ強い。	1mm以下の長石粒を多く含む。1~3mmの大赤褐色、灰黒色粒をごくまれに含む。	外面:10YR7/2(にい黄橙) -10YR6/2(灰黄橙) 内面:2.5Y6/1(黄灰)	焼成A。破片下端に円形透かし孔

番号	器種	部位	法量 (cm)	調 燈	胎 土	色 調	備考
8	円筒	口縁部～肩部	口径:35.0 肩幅:31.0 タガ(下底):2.4 (上底):1.4 (高さ):1.0	外面:ヨコハケ後、ヨコハケ(C種:7本/cm・幅5cm)、口縁端部、タガ周辺ヨコナデ。 内面:横方向へ横ケ(7~8本/cm、幅5cm以上)後、口縁端部、タガ周辺ヨコナデ。タガ間に指標压痕。	1~3mm以下の長石粒を多く含む。	外面:10YR8/3(浅黄褐) 内面:10YR8/3(浅黄褐)	焼成B、2方向の円形透かし孔あり。
9	"	口縁部	-	外面:ヨコハケ(C種:5本/cm)、口縁端部ヨコナデ。記号状のヘラ書き状あり。 内面:ナメ方向のハケメ(5本/cm)、口縁端部はヨコナデ。やや下よりに指標压痕。	1mm以下の石英、長石、赤褐色粒を含む。	外面:10YR8/3(浅黄褐) 内面:10YR8/4(浅黄褐)	焼成B
10	"	"	-	外面:タテハケ後ヨコハケ(C種:8本/cm)、口縁端部ヨコナデ 内面:ナメ方向～横方向ハケ(8本/cm)、口縁端部ヨコナデ。	1mm程度の石英、長石粒を含む。	外面:10YR8/3(浅黄褐) 内面:10YR8/2(灰白)	焼成B
11	"	"	-	外面:タテハケ(9本/cm)後ヨコハケ(7本/cm)、口縁端部ヨコナデ。 内面:ナメ方向のハケメ(5本/cm・10本/cm)、口縁端部ヨコナデ。	1mm以下の長石粒、2~8mm大の暗赤褐色粒を含む。	外面:SYR7/6(褐) 内面:SYR7/6(褐)	焼成B
12-①	"	肩部	タガ(下底):2.3 (上底):1.4 (高さ):1.0	外面:タテハケ(4本/cm)後ヨコハケ(C種:5本/cm)、タガ周辺ヨコナデ。 内面:ナメ方向のハケメ(5本/cm)後ナデ。	1mm以下の長石、石英粒、1mm程度の赤褐色粒を含む。	外面:10YR8/4(浅黄褐) 内面:10YR8/3(浅黄褐)	焼成B、腹片上端に円形透かし孔。
12-②	"	"	タガ(下底):2.3 (上底):1.4 (高さ):1.2	外面:ヨコハケ(B種:5本/cm)、タガ周辺ヨコナデ。 内面:ナメ方向のハケメ(5本/cm)後ナデ。	1mm程度の長石、石英粒を含む、赤褐色をまばらに含む。	外面:10YR8/4(浅黄褐) 内面:7.5YR8/6(浅黄褐)	焼成B
12-③	"	"	-	外面:タテハケ(5本/cm)後ヨコハケ(C種:5本/cm)、タガ周辺ヨコナデ。 内面:ナメ方向のハケメ(5本/cm)後ナデ。	1mm以下の長石、石英粒、1mm程度の赤褐色粒を含む。	外面:10YR8/4(浅黄褐) 内面:10YR8/3(浅黄褐)	焼成B、タガ耗落
13	"	"	タガ(下底):2.5 (上底):1.5 (高さ):1.1	外面:タテハケ(7本/cm)後ヨコハケ(C種:7本/cm)、タガ周辺ヨコナデ。 内面:ナメ方向のハケメ(6~7本/cm)後、タガ裏面にヨコナデ、後継方向のナデ。	1mm以下の長石粒を多く含む、1~3mm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面:2.5Y8/3(浅黄) -7.5Y8/4(浅黄褐) 内面:2.5Y8/3(浅黄)	焼成B
14-①	"	"	タガ(下底):2.5 (上底):1.3 (高さ):1.0	外面:タテハケ(6本/cm)後ヨコハケ(C種:6~7本/cm)、タガ周辺ヨコナデ。 内面:ナメ方向のハケメ(6~7本/cm)、その下には強いナデか指標压痕と思われるわずかな凹凸と大形の砂跡が移動した痕跡が認められる。	1mm程度の長石粒、1~3mm大の暗赤色、黑色粒を含む。	外面:7.5YR6/4(にい褐) 内面:7.5YR6/3(にい褐)	焼成A
14-②	"	"	タガ(下底):2.5 (上底):1.3 (高さ):1.0	外面:タテハケ(7本/cm)後、タガより上はヨコハケ(合せ5~6本/cm・幅5cm以下)、下はヨコハケ(C種:6~7本/cm)。 内面:横方向のハケメ(6本/cm)後ナデ。	1mm程度の長石、石英粒を多く含む。	外面:2.5YR7/8(褐) -10YR8/3(浅黄褐) 内面:10YR8/6(黄褐)	焼成B
15	範彫?	"	-	外面:ヨコハケ(C種:8本/cm) 内面:横方向～ナメ方向ハケ(8本/cm)	1mm程度の長石粒を多く含む。	外面:5P96/1(青灰) -5RP6/1(紫灰) 内面:N6/G(Y)灰	焼成A
16	"	基底部	-	外面:ヨコナデ 内面:ケズリあるいは強いナデ	1mm以下の長石粒を多く含む。	外面:10YR8/2(灰黄褐) 内面:2.5Y6/1(黄灰)	焼成A

番号	器種	部位	法量(cm)	測定	胎上	色調	備考
17	葫蘆形?	基底部		外面:タテハケ(6~9本/cm)後ヨコハケ(C種?6~9木/cm)横G~7cm 内面:タテハケ(6~9本/cm)横(4本以上)片上端部にヨコナデ、一部に能方向の強いナデあるいはケズリ。	1mm以下の石英、長石、角閃石、赤褐色粒を比較的多く含む。	外面:2.5YR6/2(赤赤) 内面:2.5YR7/6(橙)	焼成A
18-①	円筒?	筒部	箇部径:28.8 タガ(下底):2.1 (上底):1.0 (高さ):1.0	外面:基本的に縱方向からナナメ方向のハイコハケ(10木/cm)、縱方向のハイメがよく残っている。タガ周辺はヨコナデ。 内面:(ハケ後?)ナデ、大形の移粒が移動した跡跡が残る。	1mm以下の石英、長石、角閃石、赤褐色粒を多く含む。	外面:SYR6/6(橙) 内面:SYR6/6(橙)	焼成C。形象埴輪の基部か。
18-②	"	"	タガ(下底):2.6 (上底):1.0 (高さ):1.2	外面:細かいヨコハケ。タガ周辺はヨコナデか。 内面:不明	1mm以下の長石粒を多く含む。1~2mm大の暗赤褐色をまばらに含む。	外面:5YR6/8(橙) -5YR6/6(橙) 内面:5YR7/6(橙)	焼成C。形象埴輪の基部?
18-③	"	"	-	外面:タテハケ後ヨコハケ(12本/cm) 内面:ナデ	1mm以下の長石粒を多く含む。1mm以下の赤褐色粒をまばらに含む。	外面:6.25YR6/6(橙) 内面:5YR6/8(橙)	焼成C。形象埴輪の基部?
18-④	"	"	-	外面:タテハケ後ヨコハケ(10本/cm) 内面:縱方向ナナメ方向ハケ(後ナデ?)	1mm以下の長石、角閃石を含む。1mm以下の赤褐色粒をまれに含む。	外面:5YR6/6(橙) -5YR4/6(赤褐) 内面:5YR4/4(にじみ赤褐)	焼成C。形象埴輪の基部?
18-⑤	"	"	タガ(下底):2.2 (上底):0.8 (高さ):1.1	外面:(タテハケ後)細かいヨコハケ 内面:ナデ	1mm以下の石英、長石、角閃石、赤褐色粒を多く含む。	外面:5YR6/6(橙) 内面:5YR6/8(橙)	焼成C。形象埴輪の基部?
18-⑥	"	"	タガ(下底):2.5 (上底):1.0 (高さ):1.0	タガ(下底)内外面とも調整不明	1mm以下の長石粒を多量に含む。1~3mm大の暗赤褐色をまばらに含む。	外面:5YR5/8(明赤褐) -5YR5/6(明赤褐) 内面:5YR6/8(橙)	焼成C。形象埴輪の基部?
19	"	口縁部	-	外面:タテハケ(6本/cm)、日錫端部 周辺ヨコナデ 内面:ナデ?	1mm以下の長石粒を多く含む。1~2mm大の赤褐色粒をまれに含む。	外面:5YR5/6(明赤褐) 内面:5YR5/6(明赤褐)	焼成C。形象埴輪の一部か可能性あり
20	"	"	-	外面:タテハケ(4本/cm)後ヨコハケ(4木/cm) 内面:ヨコハケ(4本/cm)	1mm以下の長石粒を多量に含む。1~3mm大の赤褐色をまばらに含む。	外面:5YR5/8(明赤褐) 内面:5YR6/8(橙) -10YR7/4(にじみ黄)	焼成C
21	"	筒部	タガ(下底):2.4 (上底):1.2 (高さ):1.0	外面:ヨコハケ、タガ周辺ヨコナデ 内面:ナデ?	1mm大の長石粒を多量に含む。	外面:5YR5/6(明赤褐) 内面:5YR5/6(明赤褐)	焼成C。形象埴輪の基部?
22	"	"	-	外面:タテハケ(4本/cm)後ヨコハケ(C種?4木/cm) 内面:ナナメ方向横方向ハケ(4本/cm)	1mm以下の長石、石英粒を多く含む。1mm大の赤褐色粒をまれに含む。	外面:6.25YR4/4(にじみ橙) -5YR4/6(赤褐) 内面:5YR5/6(明赤褐) -6.25YR7/4(にじみ橙)	焼成C。形象埴輪の基部?
23	"	"	タガ(下底):1.5 (上底):0.7 (高さ):0.7	内外面とも調整不明	1mm以下~2mm大の長石、石英粒を多く含む。1mm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面:8.75YR6/5(橙) 内面:5YR5/6(橙)	焼成C。形象埴輪の基部?
24	"	基底部	-	外面:不明 内面:ナデおよび指彫痕?	1~2mm大の石英、長石、矽岩褐色粒を含む。	外面:10YR7/6(暗黄赤) 内面:10TR6/6(暗黄赤)	焼成B
25	"	"	-	内外面とも調整不明	1~5mm大の石英、長石、矽岩褐色粒を含む。	外面:8.75YR7/5(赤) 内面:8.75YR7/5(赤)	焼成B
26	"	"	-	外面:不明 内面:ナデ?	1mm以下の石英、長石粒、1mm大の赤褐色粒を比較的多く含む。	外面:5YR6/8(橙) 内面:5YR6/8(橙)	焼成C。形象埴輪の基部?
27	"	"	-	内外面とも調整不明	1mmの石英、長石粒を含む。	外面:5YR6/6(橙) 内面:5YR6/6(橙)	焼成C。形象埴輪の基部?

表3 出土埴輪観察表（形象埴輪）

番号	器種	部位	法量(cm)	文様・調整	胎 土	色 調	備考
28	短甲形		現存高:98.7 知印高:36.7 銀甲長幅 (復元):47.4 短甲短幅 (復元):29.6 草模径:65.4 基部径:35.1 タガ(下底):22.2 (上底):1.0 (高さ):1.0 タガ開幅:約12	外側:短甲部分は三角板を表現した文様。上端に斜底文、腰部に幅広の斜底文。草模に5~6列1版の山形文を3段並らす。調整は基本的にナデで、基部はタテハケ(6~8本/cm)後ヨコハケ(C種:6~8本/cm)。現状の最下段以外はヨコハケを省略。タガ開辺はヨコナデ。	1mm以下の長石、石英粒を多く含む。1~3mm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面:10YR7/3(よい黄橙) ~5YR6/6(橙) (5YR7/4(よい橙)) 内面:5YR6/6(橙)	焼成D、基部は埋立て4段、2方向の円形透かし孔を下さいに各段に穿つ。
29-①	蓋形	笠形	-	外側:(ハケメの後)ナデの後文様。 文様は平行な沈線文とそこから垂下する4束の沈線が複される。 内面:ナデ?	1mm以下の長石粒、1~3mm大の赤褐色粒を多く含む。1~3mm大の石英粒をやや多く含む。	外面:7.5YR7/4(よい紫) 内面:7.5YR8/4(浅黄橙)	焼成B
29-②	"	"	-	外側:(ハケメ(10本/cm)後)ナデ。文様は平行沈線文とそれに取り付く沈線が認められる。 内面:ナデ?	1mm以下の長石、1mm大の石英、1~3mm大の赤褐色粒をやや多く含む。	外面:7.5YR7/4(よい紫) 内面:7.5YR8/4(浅黄橙)	焼成B
30	形象埴輪片?	不明	-	外側:調整不明。左上がり(?)の沈線群が認められる。 内面:調査不明	1~2mm大の石英、長石粒をまばらに含む。	外面:7.5YR8/4(浅黄橙) 内面:5.5YR8/4(浅黄橙)	焼成B
31	"	"	-	外側:調査不明。右上がり(?)の沈線群が認められる。 内面:調査不明	1mm以下の長石、石英粒を多量に、1~3mm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面:7.5YR8/3(浅黄橙) 内面:7.5YR8/3(浅黄橙)	焼成B。破片上端にタガ?既落式。
32	家形		復元高:62.5 復元最大長:81.6 復元最大幅:55.0	二間三間、切妻の家形埴輪。 外側:(ハケメ(8~9本/cm)の後)ナデ 内面:強いナデ	1mm以下~2mm大の石英、長石粒を含むが多くない。1~3mm大の赤褐色~墨灰色粒をまれに含む。	外面:7.5YR8/4(浅黄橙) ~-2.5YR7/6(橙) 内面:5YR6/6(橙)	焼成B。屋根軒内側などに赤色顔料残存

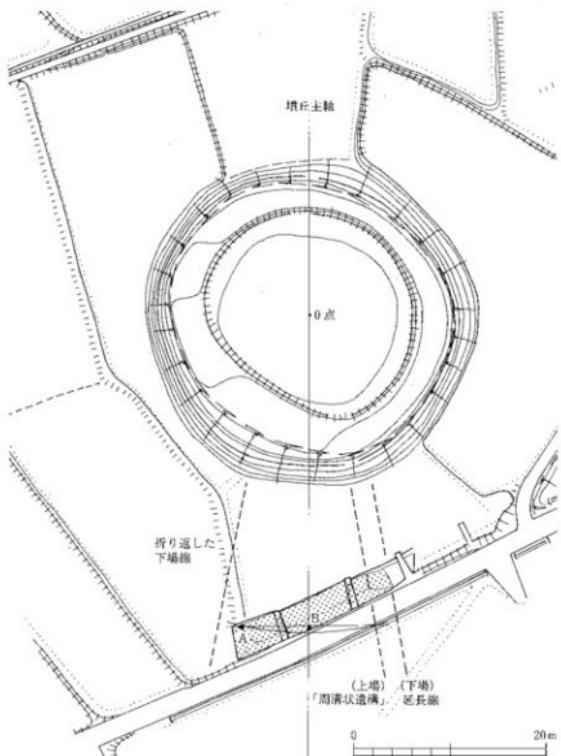
第IV章 調査の成果と展望

1) 造山第4号古墳の墳形について

a. 造山第4号古墳墳丘の復元

限られた範囲の調査であるため確証を得るに至らなかったが、第III章において「周溝状造構」、「造出し状造構」を第4号古墳に伴うものと考え、第4号古墳の墳形を前方部のやや開く帆立貝形前方後円墳と推定した。繰り返しになるがその過程を示すと、まず決定されるのは「周溝状造構」北側上場の延長線と後円部中心点(0)である。「周溝状造構」下場ははっきりしないので、上場と平行するものとして下場の延長線—前方部墳墻を想定する。北側の畠地・水田区画の段が前方部を大きく削っていないものとして、検出した「造出し状造構」上面の北端を本来の前方部上面北辺のいすこかと仮定する(A)。そこと「周溝状造構」の上場との中点(B)を求め、後円部の仮定中心と結ぶことで墳丘主軸を設定する。この主軸で「周溝状造構」の斜面を反転すると、やや開いた前方部に復元される(第18図)。前方部長に関しては前方部前端を調査範囲中には検出していないので、最低でも現状の後円部西端から約18m、丘陵自体が西側に徐々に下がっていくのでそれを大きく上回らない長さと考えられる。また、後円部も周囲がかなり削られており、現状より数m大きなもの

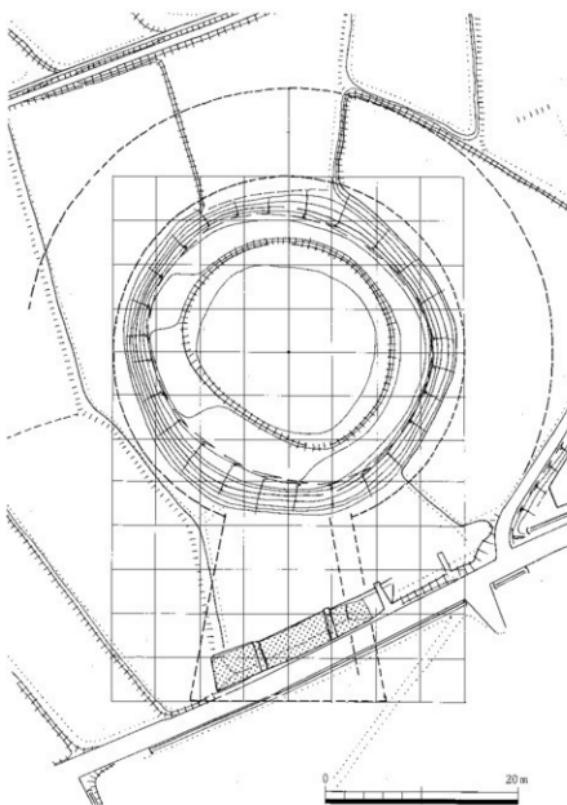
第18図 造山第4号古墳墳丘復元(S=1/500)



と思われる。仮に後円部径を36~38m、前方部長を最小値の約18mとすると、前方部前端幅は約20mとなり、全長は55mを前後する規模となる。

こうして得られた第4号古墳の復元を基に築造企画にあてはめてみることにしよう。この作業により第4号古墳の墳形に関してもより確かな復元につなぐことができることが期待される。

帆立貝形前方後円墳の築造企画に関しては、石部正志・田中英夫・宮川涉・堀田啓一らの共同研究がある¹⁰⁾。石部らの築造企画は、後円部直径の8等分値を一辺とする単位一区とすると、一区型から四区型までの4類型が帆立貝形前方後円墳にはあるというものであり、区の一辺は一尋約160cmの「大尋」と一尋約150cmの「小尋」が基準尺度になっているというものである。これを第4号古墳にあてはめると、後円部径36mとすると前方部長は現状から4区分に推定され、四区型に属する企画であると思われる。前方部の形態はくびれ部でおおよそ3区、前方部前端



第19図 造山第4号古墳墳丘の築造企画(S=1/500)

幅でおおよそ4区となる。周溝に関しては、後円部中心から半径6区の円を描くとちょうど第4号古墳東側の段の弧に一致し、周溝の幅が2区分に相当することがわかる(第19図)。

以上のように第4号古墳は石部らの築造企画から予想すると四区型になるものと思われ、それによると全長54mに復元される。また、1区は約4.5mとなり、これは小尋で3尋に相当する。

b. 復元案の問題点

以上、第4号古墳の墳形と規模を推定したが、情報不足と仮定を重ねていることもあり復元としては十分なものとは言えない。上の復元において特に問題となるものは前方部の形態に関する部分であると思われるが、そこには、①「周溝状造構」と墳丘に関するもの。②前方部幅に関するもの。③前方部長に関するもの。の3点が前方部の形態を左右する仮定的条件として挙げられる。従ってそれらの

条件の変化によって復元される墳形はかなり違ったものになると思われる。

第1の「周溝状造構」に関しては、わずかな検出部分を模式的に延長して前方部の南辺を決定している。より前方部前端が広がる形態はくびれ部の幅もあり考えにくいため、より墳丘主軸に平行に近い場合—くびれ部幅と前方部前端幅の差が少ない場合を想定し復元してみよう。主軸に平行により近い場合、他の条件が同じであれば、点Aとの距離が短くなる、すなわち前端側の幅が短くなるため主軸自体が前方部側でやや北にずれる。主軸と前方部側辺が平行であるとすると、前方部幅18m、前方部長18m以上の規模で、現復元案よりやや北に偏ったものが想定され、前方部南辺と「周溝状造構」の方向とのずれが予想以上に大きなものとなる。これは点Aの条件を変えた場合、たとえばより前方部幅を広げた場合も同じで広がった分だけ墳丘主軸も北にずれるため、「周溝状造構」のずれはもとより前方部が北側の尾根斜面側に飛び出した形態になる。従って、「周溝状造構」と矛盾しない範囲で復元した場合、前方部はやや開いた形態になることは間違いない。

第2の前方部幅に関しても、「周溝状造構」により前方部南辺がほぼ決定され、「造出し状造構」によりその幅の最小値=現復元案が決定されているため、より幅の広い場合を想定しなくてはならない。仮に北側の畠地の段の後円部と前方部の境界付近をくびれ部の名残であると考えると、他の条件を変えない場合、やはり現復元案より前方部がやや北に偏ったものとなり、前方部前端幅25mとなる。同時に斜面側にかなり飛び出した形になり、地形的にはやや不自然な印象をうける。従って、前方部幅に関しても地形的な制約から復元案と大きく隔たらないものと考えられる。

第3の前方部長に関しても、最小値が「造出し状造構」により決定されているため、より長い場合を想定しなくてはならないが、やはり丘陵端部に立地しているため復元案を大きく上回る前方部長は想定し難いものと思われる。

以上の検討から、復元方法の制約上復元値に多少の幅が生じるもの、復元案と大きく異なる墳形とはなり難い。むしろ、墳丘の変形を最小限に考えた復元案が築造企画的にも矛盾なく説明できることから、妥当な復元ととらえ得るものと思われる。

註

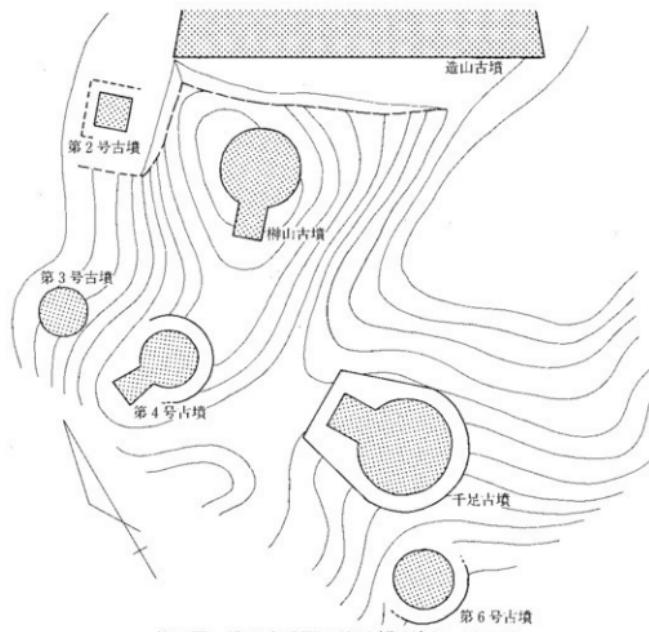
- (1) 石部正志・田中英夫・宮川 徹・堀田啓一 1980 「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究』第27巻第2号

2) 造山古墳群と造山第4号古墳

造山第4号古墳に関し、前節までに今回の調査成果から全長54m、後円部径36m、前方部長18mのいわゆる帆立貝形前方後円墳であり、造山古墳に遅れる築造時期を考えた。それでは第4号古墳は造山古墳群中どのような位置を占めるのであろうか。また、造山古墳に対する造山古墳群の性格はどういったものか。これらの問題を造山古墳群の立地・配置の状況、造山古墳群中の古墳の多くを占める帆立貝形前方後円墳という墳形などの視点から考えてみよう。

a. 造山第4号古墳の立地と造山古墳群

造山古墳群は6基の中古墳が現存するが、かつては7基存在していたようである(第1章参照)。その配置は、第2号古墳が造山古墳との関係が指摘されているものの、全体的に計画性に乏しく地形に沿った配置であると考えられる。造山古墳群の立地する丘陵をやや復元的にみると、造山古墳前方部から西に伸びる舌状の丘陵とこれにはば直交して南から伸びる丘陵が大きくみて存在しており、丘陵の方向に則して古墳が築造されていることがわかる。千足古墳、第4号古墳の前方部の方向も丘陵の方向に沿っており、それに従えば、柳山古墳の前方部も陶質土器の出土した現墳丘西側に存在した可能性が高い。



第20図 造山古墳群の地形(復元)(S=1/3,000)

また、消滅した「柳山南丘」は柳山古墳、第4号古墳の立地する丘陵の最西端部に立地していたものと思われる。第2号古墳、第3号古墳は墳形も方墳、円墳であり、千足古墳などの帆立貝形前方後円墳に比べやや小規模と思われる。第2号古墳、第3号古墳は立地も丘陵の北側斜面にあり帆立貝形前方後円墳のものと異なると言える。それに対し、第6号古墳は千足古墳と同一丘陵上に立地し、規模も南側の畠地部分、丘陵部分との崖が周溝を反映しているとすると、第4号古墳の後円部に匹敵する規模となる。第6号古墳の前方部に関しては現状からはその存否を論ずることはできないが、丘陵上に立地する他の古墳がすべて帆立貝形前方後円墳であることからすると、第6号古墳も千足古墳側に前方部が存在した可能性もある。

立地からみると、造山古墳群は柳山古墳—第4号古墳の群と千足古墳—第6号古墳の群の2群に分けられると思われ、第6号古墳に関しては不明であるものの、いずれも帆立貝形前方後円墳であると思われる。古墳群中造山古墳により近接し、言わば同一丘陵上に立地する柳山古墳—第4号古墳の群はより造山古墳に近い関係ととらえられる可能性はある。一方、その築造順は、前節で指摘したように、第4号古墳が柳山古墳に先行することはほぼ確実で、検討できなかったが千足古墳は埴輪から造山古墳と同時期とされている。したがって、築造順においても造山古墳との位置的関係などの計画性は薄いと思われ、造山古墳群は造山古墳に対する陪塚的な従属性に乏しいと考えられる。

b. 帆立貝形前方後円墳の階層性と規格性

第4号古墳を含む造山古墳群の大部分を占める帆立貝形前方後円墳の性格に関しては、周辺の帆立貝形前方後円墳と比較することから、こうした墳形、規模の位置付けを考えてみよう。

第4号古墳周辺の帆立貝形前方後円墳と言われるものは、同じ造山古墳群内に千足古墳⁽³⁾、北西部の尾根上に銭瓶塚古墳⁽⁴⁾、夫婦塚古墳⁽⁵⁾、さらに北の総社市西阿曾に隨庵古墳⁽⁶⁾などが存在する。さらに岡山県内には、長船町牛文茶臼山古墳⁽⁷⁾、山陽町西もり山古墳⁽⁸⁾、岡山市一本松古墳⁽⁹⁾、津山市茶山1号墳

古墳名	所在地	全長	後円部径	前方部長	前方部幅	類型	時期	文献
造山第4号古墳	岡山市新庄下	54m	36m	19m	18m	4区型	6期	
千足古墳	〃 〃	70m	55m	22m	25m	3区型	6期	(3)
柳山古墳	〃 〃		35m				7期	(14)
銭瓶塚古墳	総社市下林ほか	50m	35m	15m	15m	4区型?	7期	(4)
夫婦塚古墳	総社市赤浜ほか	45m	30m			3区型?	8期	(5)
隨庵古墳	総社市西阿曾	40m	30m			3区型?	7期	(6)
牛文茶臼山古墳	長船町牛文	55m	38m		17.5m	3区型?	8期	(7)
西もり山古墳	山陽町穗崎	84m	55m	26m	36m	4区型	7期	(8)
一本松古墳	岡山市北方	65m	43m	25m	25m	3区型?	6期	(9)
茶山1号墳	津山市瓜生原	21m	15m	9m	11m	3区型	8期	(10)
井口車塚古墳	津山市川辺	35.5m	30m	7.5m		2区型?	8期	(11)
天狗山古墳	真備町下二万	60m	46m	17m	20m	3区型?	7期	(12)
仙塚古墳	笠岡市山口ほか	43m	36m			3区型?	7期	(13)

表4 県下の帆立貝形前方後円墳

	3区型	4区型	その他
55m級	千足古墳 一本松古墳		西もり山古墳
36m級 (2/3規模)	牛文茶臼山古墳	造山第4号古墳 銭瓶塚古墳	
27m級 (1/2規模)	隨庵古墳 仙人塚古墳 夫婦塚古墳?		井口車塚古墳(2区型) (高野山根1号墳)
その他	天狗山古墳(4/5?)		茶山1号墳(1/4?)

表5 帆立貝形前方後円墳の後円部規模と階層性

○、同井口車塚古墳³⁰、真備町天狗山古墳(矢形大塚古墳)³¹、笠岡市仙人塚古墳³²などが知られている。また、柳山古墳³³も帆立貝形前方後円墳であると言われるが、前方部の位置、規模、形態なども不明である。なお第4号古墳との関係上、それと大きく隔たらない時期、中期中葉～後葉、10期編年のVI～VII期に位置付けられるものに限った。これらには発掘調査などにより墳形が確認されたものは少なく、その上、前方後円墳に比べ後円部の占める割合が高い帆立貝形前方後円墳においては墳形に差の出る要素自体も少ないため墳形を比較するのは容易ではない。しかし、定形的な前方後円墳では築造規格を共通する古墳が指摘されており、帆立貝形前方後円墳においてもこうした築造規格の存在は当然予想されることである。また、石部らの築造企画論はどこまで直接的に築造規格を表現しているかは解らないが帆立貝形前方後円墳、造出し付き円墳を含めた前方後円墳の墳形の特徴と規格性を表すのに有効と考えられる。以上の立場からこれらの帆立貝形前方後円墳を比較していくこととする。

比較的の規模を比較しやすい後円部を比較すると、後円部径には55m前後、36m前後、28～30mのものが複数あることがわかる。これらは後円部径を8等分すると1区の長さがそれぞれ約7m、約4.5m、約3.5mとなっており、55m前後のものを1とすると、2/3、1/2の規模である可能性が考えられる。後円部径55mとされる千足古墳と後円部径36mと推定した第4号古墳の墳丘を2:3の割合で比較してみると、前方部は第4号古墳のはうが長いことがわかるが、第4号古墳の後円部側の周溝の幅で千足古墳の周溝、周堤帯を復元すると現状とよく一致し(第21図)、こうした後円部規模の規格の存在は蓋然性が高い。そのように考えると、天狗山古墳は後円部径46mとされ、4/5規模、津山市茶山1号墳などの後円部径15m規模のものは1/4規模である可能性がある。以上のように後円部の規模においては、帆立貝形前方後円墳の在り方に階層性があることが伺われる。一方、前方部の形態は様々であり、千足古墳など石部らの企画論の3区型と見られるもの、第4号古墳など4区型と見られるもの、西もり山古墳など4区型と見られるが前方部幅が幅広のものがある。また、井口車塚古墳は1/2規模の後円部の

ものと見られるが、前方部を含めた企画は1～2区型になるとと思われ、後円部規模の階層性が帆立貝形前方後円墳ばかりでなく、造出し付き円墳の範疇に入ると思われるものにも及んでいる可能性がある。

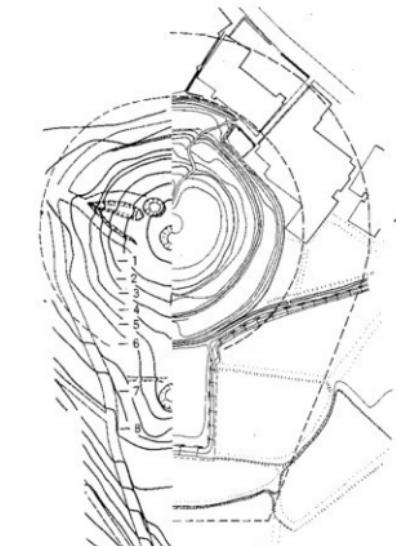
第4号古墳、千足古墳を軸に築造企画と墳丘測量図を直接比較することを併用しつつ比較してみよう。千足古墳は後円部径55～60m、前方部長はその3区分、同幅は3～4区分と見られる。前方部は同一幅で正方形に近い形態に見えるが、開墾などによる変形も予想され、やや開く形態である可能性もある。周囲に周溝及び周堤帯を伴うと言われるが、その幅は前方部前端側で2区分と思われる。千足古墳と同様、3区型になると思われる古墳には、36m規模のものに牛文茶臼山古墳、30m規模のものに隨庵古墳、仙人塚古墳がある。一本松古墳は後円部径43mとされるが、後円部の墳端は明確でなく、仮に55m規模とするとやはり3区型に属するものと思われる。

一本松古墳は戦時中の機関砲の設置により後円部墳頂を破壊されていることもあり、特に後円部において墳端が明瞭でない。また現状では、後円部の外縁を通る道の内側に墳端を想定して後円部径43m、全長65mとされている。これを千足古墳と比較すると、前方部前端の位置、前方部の形状や後円部上部の等高線などよく一致することが看取される(第22図①)。これに従うならば、後円部の墳端は外縁を通る道の外側に想定されるが、道などによる変形のためか現状で確認することはできない。しかし、先述の前方部、後円部上部の形状等から、一本松古墳は千足古墳と同規模墳である可能性が高い。

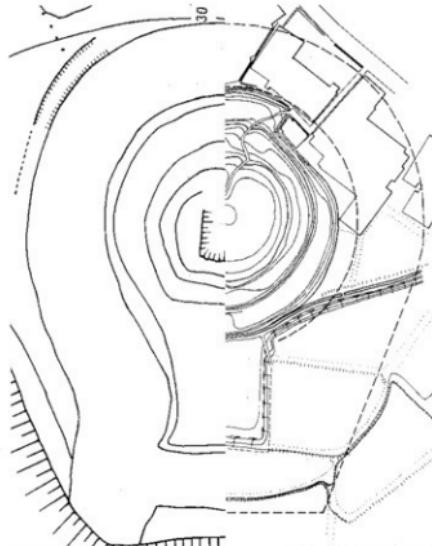
牛文茶臼山古墳は公表されている測量図にやや不安は残るが、前方部前端や幅などの形状ばかりか、牛文茶臼山古墳外周の周堤帯状の平坦面の平面形も千足古墳の想定される周溝及び周堤帯の平面形と非常によく一致することがうかがえる(第22図②)。以上から牛文茶臼山古墳は千足古墳の2／3規模墳と考えられる。



第21図 造山第4号古墳(右)と千足古墳(左)



第22図① 千足古墳(右)と一本松古墳(左)
千足古墳(1/1,000) 一本松古墳(1/1,000)



第22図② 千足古墳(右)と牛文茶臼山古墳(左)
牛文茶臼山古墳(S=1/667) 千足古墳(S=1/1,000)



第22図③ 千足古墳(右)と隨庵古墳(左)
隨庵古墳(S=1/500) 千足古墳(S=1/1,000)



第22図④ 千足古墳(右)と仙人塚古墳(左)
千足古墳(S=1/1,000) 仙人塚古墳(S=1/500)

隨庵古墳、仙人塚古墳はいずれも前方部の形狀は不明瞭で墳端も明らかでないが、隨庵古墳では墳頂から -4 m の等高線が後円部後端及び前方部前端とほぼ一致し(第22図③)、仙人塚古墳においても前方部前端及び、後円部側の周溝外郭線が想定される千足古墳の周溝外郭線にはば一致するほか、前方部上の埴輪列も千足古墳前方部とほぼ平行となる(第22図④)。いずれも、前方部の形狀が不明瞭なため断定はできないが、千足古墳の $1/2$ 規模墳である可能性は高い。

一方、第4号古墳は先述のように後円部径 36 m 、前方部前端幅 $3 \sim 4$ 区分の4区型とみられ、類似した形態のものとしては銭瓶塚古墳があげられる。銭瓶塚古墳は後円部径 35 m 、前方部長 15 m 、幅 15 m とされ、前方部はほぼ長方形かやや広がる形態のものと思われる。第4号古墳と比較すると銭瓶塚古墳の墳端が不明であるものの前方部規模、形態とも類似する。第4号古墳の復元墳端から推定すると、銭瓶塚古墳は標高 $38.5\text{ m} \sim 39.0\text{ m}$ の等高線付近に墳端が想定される。いずれも墳形・墳端が確定的でないため断定し得ないがほぼ同規模墳と認められる。(第23図)

墳形、特に前方部の形態が調査により確定した例がないため、とりあえず同規模墳などという表現を用いたが、これらの墳形は、築造企画や後円部の規模にみたように極めて規格性の高いものであることが予想され、それぞれ相似形である可能性が高い。このように帆立貝形前方後円墳、そしておそらくほかの中の前方後円墳、造出し付き円墳は後円部規模による階層性と前方部を含めた形態の示す関係の両者が、厳密な規格により表現されているものとみられる。

以上、5世紀中葉～後葉に位置付けられる帆立貝形前方後円墳の規模と墳形の階層性やその他の関係が内包されている可能性についてみてきた。帆立貝形前方後円墳に関しては大和政権による古墳の規制⁶⁸、巨大前方後円墳と中規模以下の古墳との各差の明瞭化を意図したもの⁶⁹、などの現れであるとの意見がある。これらの古墳の多くが武具類を副葬する古墳であるこもあ



第23図 造山第4号古墳(右)と銭瓶塚古墳(左)

り、畿内中枢との関係で中小首長層の掌握、再編、派遣などの語で語られることが多い。こうした武具類は畿内中枢から供給されたものとされ、軍事組織の階層的秩序の中にこれらを副葬する首長たちが位置付けられていたものであり、規模や墳形に現れた階層性はこうした軍事組織的な階層秩序を基本とするものであると思われる。しかし、ここで取り上げた例をみても、帆立貝形前方後円墳自体の階層性や形態の差や、それぞれの古墳の地域内における状況も、巨大前方後円墳に付随的に存在するもの、単独であるもの、中小の前方後円墳などと系列的に存在しているものなど多様であり、規制や格差の明瞭化、あるいは畿内中枢との軍事的関係のみに帆立貝形前方後円墳の在り方を求めるには一層複雑な関係がその背後にあるように思われる。もちろん、首長間の関係は畿内中枢との軍事的関係のみに限定することはできず、千足古墳の石室や櫛山古墳の馬形帶鉤、陶質土器などの例をあげるまでもなく諸関係の集合体であることは言うまでもない。墳形においても定型的な前方後円墳同様、築造規格を同じくする古墳の存在が予想される。例えば千足古墳は石部らのあげる例では3区型の堺市こうじ山古墳、堺市定の山古墳と築造規格上の関連が考えられる。帆立貝形前方後円墳の多様な形態は一石部らの論文では4型式12種があげられている—その墳形の選択において自由であったとは考えられず、必ずやその背後には何らかの意図が存在するものと思われる。こうした築造規格に表現される関係が具体的にどのようなものか回答を用意していないが、今後、同一築造規格墳の追及とともに、規模や副葬品などを含めた総合的な比較のうちに明らかにし得る問題と思われる。

以上、帆立貝形前方後円墳の規模と規格に関して千足古墳と第4号古墳を中心みてみた。本来、築造規格や相似形墳の認定にはより細部にわたる検討が必要であろうことは十分承知の上で、かなり大胆に比較していることは否めない。また、築造企画に関しても、当然基準となる後円部径のとりかたでも差が出るであろうし、誤差の扱い方によってはいかなる企画論でも適用可能となるなど問題があることも確かである。後円部の比率が高い帆立貝形前方後円墳では、前方部の形状が不明瞭な場合、後円部径を合わせればどの古墳も同じに見えることもないではない。ここでは問題提起的にやや飛躍的な論を展開したことを断っておきたい。

c. 造山古墳群とその評価

造山古墳群は帆立貝形前方後円墳、円墳、方墳からなり、造山古墳という巨大古墳に隣接するという立地からも造山古墳の「陪塚」という評価が一般的である。

西川宏は陪塚の条件として、「①規模・施設・副葬品等が量的あるいは質的に劣り（従属性）、②同時代の築造にかかわり（同時代性）、③ある程度計画的に配置されたとみられる（計画性）」の3条件をあげ、配置状態を三類型に分類したうち「丘陵上などに、主墳の前方または後方またはその両方に一ないし数基存在するもの（A型）」の例として備中造山古墳をあげている。また、陪塚被葬者については「首長と密接な主従関係で結ばれた「近臣」の場合が多かった」と推察し、「地方的統一・列島の統一という事業の進展に伴う支配方式の複雑化に対応して、首長の権力行使の実務を処理するための機関の整備が必要となり、このような権力機関にあって、各種機能、職種を分掌する官僚的階層が結集され」たとする。⁵⁸⁾

春成秀爾は造山2号墳が造山古墳の「外帶」に接して西隅に築かれていることを指摘し、「少なくとも造山2号墳だけは、造山古墳の陪塚として造山古墳と同時に設計施工された可能性がつよい」としている。⁵⁹⁾

宇垣匡雅は出土埴輪から「造山古墳と同時に千足古墳と削平された古墳（柳山中古墳）が築かれ、その後縦続的に他の古墳の築造が行われた」と考え、こうした築造状況や、吉備の中規模の首長墓に匹敵する規模でありながら帆立貝式古墳や造り出し付き円墳という墳形をとることから「陪塚」と考える。また、群の形成がある程度の時間幅をもっている、帆立貝式古墳の比率が高い、基本的に竪穴式石棺が使用されている、計画的配置が見られないなどの特徴をあげ、主墳との関係は「畿内の巨大古墳の場合よりも從属の度合いが低かった可能性が考えられる」としている。

このように、西川は殉死の可能性を考え主墳被葬者の隔絶性、主墳被葬者への從属を強調し、春成も出土埴輪の編年から柳山古墳などが造山古墳と時期差をもつことから、同時代性、計画性を重視する中でとりあえず第2号古墳に限定したものとおもわれる。それに対し宇垣はある程度の時期差を認めた上で、畿内巨大古墳の場合に比べ從属度が低かった可能性を指摘する。このように「陪塚」とみる点では共通するものの、その内容には若干の差が認められ、これら中小規模墳の被葬者の性格、主墳—すなわち造山古墳被葬者との関係、ひいては地方における権力機構の在り方に対する理解の差がこのような差に現れているとも見ることができる。しかし、こうした「陪塚」被葬者の性格や主墳被葬者との関係などは、「近臣」「從属」といった言葉以上には語られていないのが現状といえる。

それでは、造山古墳被葬者と造山古墳群の被葬者たちの関係はどのようなものであろうか。ここまで検討では、古墳群の立地や配置状況は地形に沿ったものであり、造山古墳との計画的関連性に乏しいこと。造山古墳群は千足古墳を中心とするもの、柳山古墳を中心とするものの2群に分けられる可能性があること。帆立貝形前方後円墳には規模と墳形に階層性や諸関係の表現が内包されること。を指摘した。そこから伺われる造山古墳群の被葬者像は西川のいう「各種機能、職種を分掌する」人物であると同時に、從属性的な官僚的階層というよりはそれよりより自立的な人物たちである印象をうける。それを考へるにあたって、まずいくつかの仮説的前提を用意したい。

まず第1に、造山古墳群の被葬者たちは造山古墳被葬者と血縁関係にあったということである。特に造山古墳群の、造山古墳に対する近接度、吉備内では中小の首長墓に匹敵する規模、などは周囲の同時期の中小規模古墳群中隔絶的であり、從属性的な集団首長墓のあつまりとはとらえがたい。また、ある程度の時期差をもって築かれていることも、古墳群の形成が造山古墳被葬者一世代の権力機構を基礎とするものではなく、血縁的関係に基づいたものと考える。もちろんこれらの血縁者は造山古墳被葬者の権力機構内においては中枢をになっていたものとおもわれる。

これに対しては、千足古墳の石室などからの反論もあるだろう。例えば、春成秀爾は千足古墳の石室構造が九州肥前地域のものと共通するものであること、千足古墳の石障が九州松浦産砂岩製らしいことから、造墓集団の移動だけでなく「被葬者もまた肥前地方の出身者であったと考えるのがむしろ自然」とする。しかし、これらの古墳は、例えば千足古墳では石室に肥前地方の、例えば柳山古墳では馬形帶鉤や陶質土器に朝鮮半島の、例えば造山古墳では前方部石棺に肥後地方とのつながりが指摘されているが、同時に墳形や埴輪などに畿内的な特徴も無視できないものであり、むしろ、それらの諸関係の集合体ととらえることができる。従って、これらの古墳の被葬者は九州や畿内出身者ではなく、権力機構内でその諸地域との関係を分掌した人物ととらえられる。

第2に、第1の前提と関係するが造山古墳群被葬者は造山古墳被葬者と活動を共にした近い世代の血縁者であり、造山古墳被葬者の次世代、次次世代の首長ではないことである。すなわち系統的、系譜的な造墓活動の結果ではなく、比較的近い世代の築造を契機とするものと考える。また造山古墳の西方3km付近の三須地域には作山古墳を中心とする古墳群と作山

古墳を中心とする古墳群に関しては、別の造墓主体であるとし、「二つの首長系譜によって備中南部地域の首長権が保持され」ていたものとする解釈もある¹¹⁰が、一つの造墓主体が両地域にまたがって前方後円墳を築いたものと考える。これに対しては両古墳群が律令制下、都宇郡と雀屋郡の別の郡に属していたことなどからの反論もあるだろうが、両古墳群間の丘陵上には多数の中小の古墳が築かれていることからも、一つの首長系譜とそれに従属する集団首長墓群が両地域にまたがって存在しているものと思われる。この地域は古代山陽道のルートの想定される地域であり、古代山陽道に先行する陸上交通路の存在を見据えた選地であり、そのためにルートに沿った東西に長い古墳群の形成がなされたものと思われる。

第3に、造墓・埋葬行為における親族構造の原理はいわゆるキヨウダイ原理ととらえる。すなわち同一墳丘に複数の被葬者が存在する場合、被葬者の関係はキヨウダイ、家長と家長を継承しなかったその子たちという関係、田中良之のいう基本モデルI、基本モデルIIに相当すると考える¹¹¹。田中は複数埋葬の被葬者の関係を歯冠計測値から推定し、複数埋葬に現れた親族構造の原理が、キヨウダイ原理である基本モデルIから父系継承が強調された基本モデルII、夫婦原理を含む基本モデルIIIへ変化したものとしている。これらは時期的には、基本モデルIが5世紀後半を下限、基本モデルIIが5世紀後半から6世紀後半、基本モデルIIIが6世紀前半から6世紀後半とされている。これをそのまま造山古墳および造山古墳群にあてはめることはできないし、また田中の検討の対象はほとんどが同一埋葬主体の複数埋葬例であり、同一墳丘内の中心埋葬とそれ以外の埋葬との関係はほとんど検討されていないといえる。しかし、造山古墳群被葬者が造山古墳被葬者の血縁者であるとするならば、当然こうした埋葬原理にしたがって埋葬される位置—造山古墳墳丘内、隣接する古墳群内など—が選定されたものと思われる。

上にあげた前提をまとめると、造山古墳群の被葬者たちは①造山古墳被葬者の血縁者集団であり、彼の権力中枢内において職務を分掌し権力を支えた者たちで②造山古墳被葬者と近い世代の人物であり、③その配偶者を含まないとすることができる。田中のモデルに照らして検討すると、造山古墳被葬者に血縁的、世代的に近い人々という点で、造山古墳被葬者のキヨウダイ、首長を継承しなかった子、オジ・オバ、イトコとその子程度の範囲が考えられる。このうち造山古墳被葬者のキヨウダイ、首長を継承しなかった子は複数埋葬例からは造山古墳墳丘内に埋葬され得る人々と思われ、あるいは造山古墳被葬者のキヨウダイは先代首長の、首長を継承しなかった子は次代首長の墳墓に埋葬される可能性もあり、首長の直系家族として一線を画していたともとらえられる。こうした人々が「一線を画した」ということが、首長と同一墳丘に葬られることであるのか、それこそ造山古墳群のような独立した墳墓を造営することが可能であったかはわからないが—造山古墳には少なくとも前方部墳頂に埋葬主体の存在が想定されており、被葬者にはこうした人々が候補としてあげられる。また、先に検討したように造山古墳群は柳山古墳—第4号古墳の群と千足古墳—第6号古墳の群の2群に分けられる可能性もあり、オジ・オバ、イトコなどの複数の家系を想定し得る関係のほうが古墳群の構造を理解しやすいと思われる。

以上3点の仮説的前提から造山古墳群の被葬者たちを造山古墳被葬者の血縁者たちと考えたが、これらの人々は千足古墳や柳山古墳にみるようにそれぞれに对外的な関係を伺わせる石室や副葬品をもち、さらに前節で検討したように規模と墳形に表示される関係のなかに位置付けられている。これは各被葬者が、造山古墳被葬者を頂点とする集権的な権力機構のなかで官僚的に活動したのではなく、あるいは吉備政権内の職務分掌の内に、あるいは半ば自立的に周辺諸集団との関係を結びつつ全体として造山古墳被葬者のものと吉備政権を構成していたことを表しているものと思われる。特に、墳形の規格性が畿内方面との関係を示し、甲冑が畿内中枢から配布されたものであるとするならば、こと畿内中枢との関係

において各被葬者が相対的に自立していた、あるいは畿内側からそのような扱いを受けていたことが伺われる。

以上のように、造山古墳群の被葬者が造山古墳被葬者の血縁者たちと考え、各被葬者は吉備政権内部の職務を分掌すると共に、こと畿内中枢との関係においては相対的に自立した関係をもっていたことを想定した。すなわち、これらの被葬者たちは吉備内部の氏族・部族的関係と畿内中枢を中心とする組織の中に2重に規定される存在であったと思われる。こうした構造はそのまま吉備政権の、あるいは地方政権の特徴と言えるものである。造山古墳群被葬者のこうした性格は、造山古墳群の出現が主墳被葬者の隔絶性、主墳被葬者への従属、官僚的階層の結集を意味するのではなく、造山古墳被葬者の強大な権力により、畿内中枢との関係においてその血縁者たちの相対的位置付けが上昇した結果と評価される。

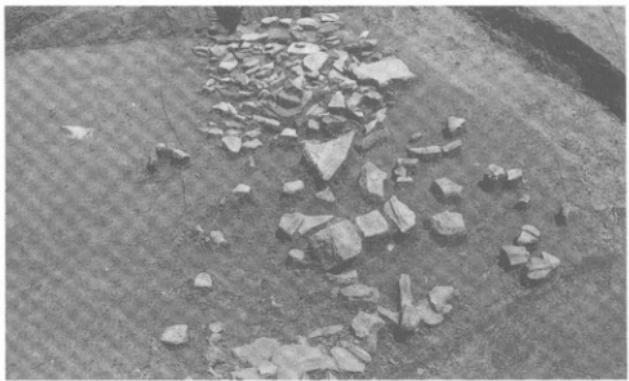
註

- (1) 春成秀爾 1983 「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』
- (2) 宇垣匡雅 1992 「吉備の中期古墳の動態—使用石材の検討から—」『考古学研究』第39巻第3号
- (3) 和田千吉 1919 「備中國窪郡新庄下古墳」『考古学雑誌』第9巻第11号
梅原末治 1928 「備中千足の裝飾古墳」『近畿地方古墳墓の調査3』
西川 宏 1986 「千足古墳」『岡山県史』考古資料
- (4) 高田明人 1987 「錢瓶塚古墳」『総社市史』考古資料編
- (5) 谷山雅彦 1987 「夫婦塚古墳・繩笠古墳」『総社市史』考古資料編
- (6) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁貢子 1965 「総社市隨庵古墳」『総社市教育委員会』
- (7) 梅原末治 1957 「岡山県下の古墳調査記録(二)」『瀬戸内海研究』第9・10合併号
西川 宏 1986 「牛文茶臼山古墳」『岡山県史』考古資料
- (8) 梅原末治 1924 「備前国西高月村の古墳」『歴史と地理』第13巻第4号
正岡睦夫 1976 「岡山県赤磐郡山陽町森山・廻り山古墳における表採資料」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6 岡山県教育委員会
岡山県史編纂室(作団) 1986 「付図3 両宮山古墳群」『岡山県史』考古資料
- (9) 鎌木義昌 1962 「一本松古墳など」『岡山市史』古代編
近藤義郎 1986 「一本松古墳」『岡山県史』考古資料
- (10) 保田義治 1989 「茶山古墳群」津市埋蔵文化財発掘調査報告 第27集 津市教育委員会
- (11) 小郷利幸 1994 「井口車塚古墳」津市埋蔵文化財発掘調査報告 第52集 津市教育委員会
- (12) 西川 宏 1986 「天狗山古墳」『岡山県史』考古資料
岡山大学考古学研究室天狗山古墳発掘調査委 1998 「天狗山古墳発掘調査現地説明会資料」
- (13) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁貢子 1965 「長福寺裏山古墳群」長福寺裏山古墳群・閔戸庵寺調査推進委員会
- (14) 岩崎 東 1982 「備中櫛山古墳群の遺物について」『岡山県史研究』第3号
西川 宏 1986 「櫛山古墳」『岡山県史』考古資料
- (15) 小野山節 1970 「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号
- (16) 石部正志・田中英夫・宮川 徹・堀田啓一 1980 「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究』第27巻第2号
- (17) 西川 宏 1961 「陪塚論序説」『考古学研究』第8巻第2号
1975 「吉備の國」古代の国々-5 学生社
- (18) 註(1)文献
- (19) 註(2)文献
- (20) 註(1)文献
- (21) 註(2)文献
- (22) 田中良之 1995 「古墳時代親族構造の研究—人骨が語る古代社会—」 柏書房

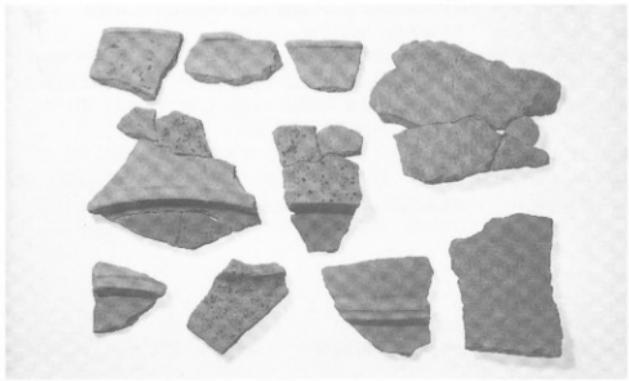
Fig. 1



造山第4号古墳全景
(調査部分・工事完了後)

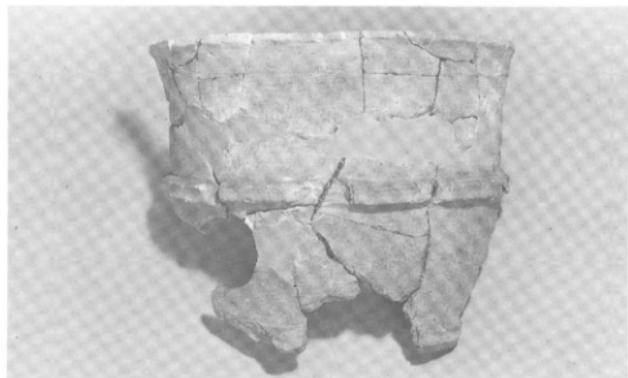


埴輪出土状況

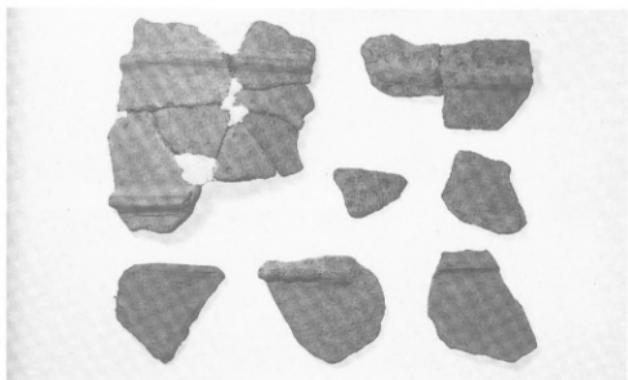


朝顔形埴輪

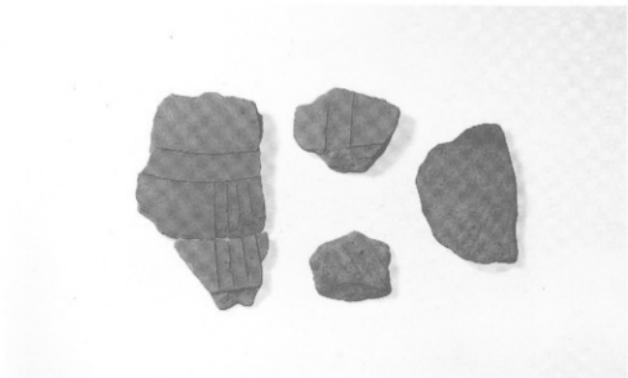
Fig. 2



円筒埴輪(8)

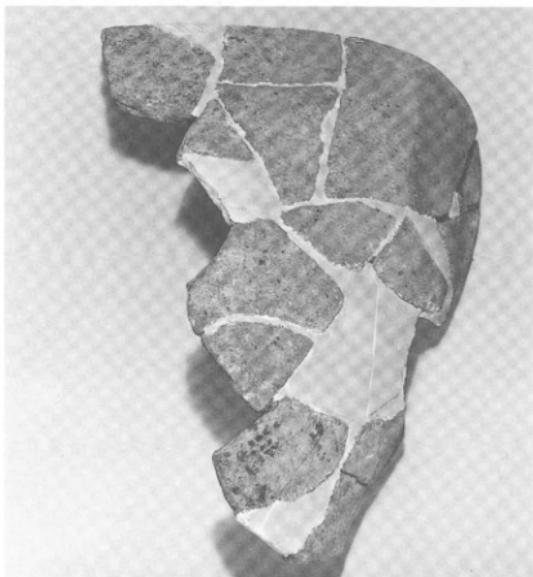


円筒埴輪ほか



形象埴輪（蓋形ほか）

Fig. 3

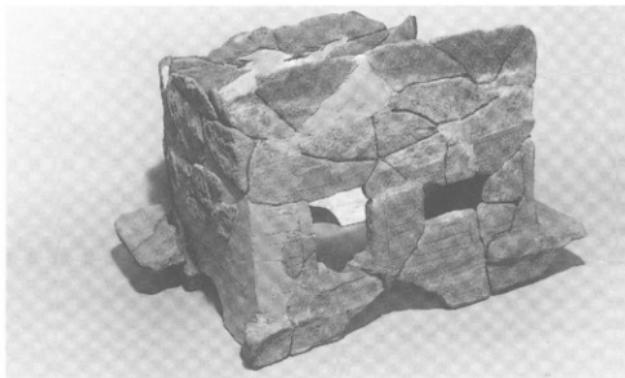


短甲形埴輪（短甲部）

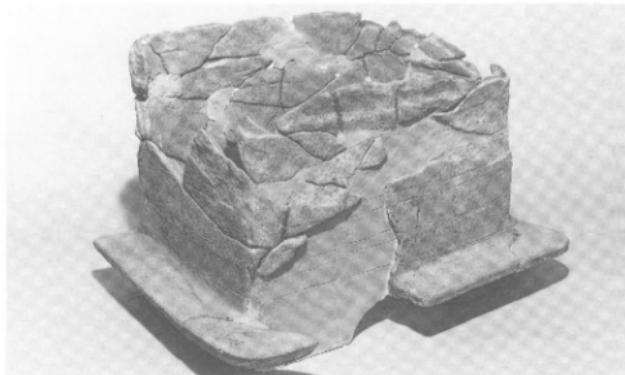


短甲形埴輪（草摺・基部）

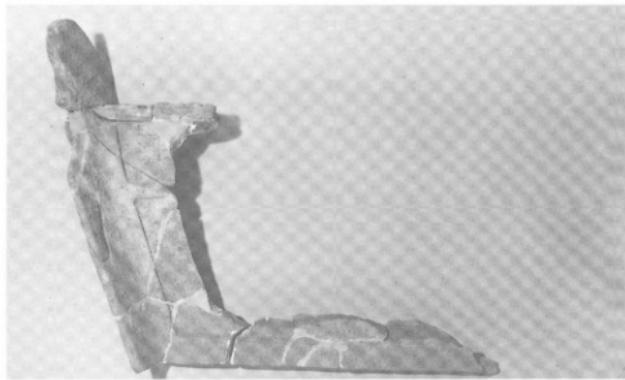
Fig. 4



家形埴輪（正面）



家形埴輪（背面）



家形埴輪（屋根）

あとがき

「真金吹く」吉備の中心地に位置する岡山市、ここに生活する私たちの足元にはその数千年に及ぶ歴史が今も眠っています。その一つひとつは、きらびやかでも高価でもない雑器たちであり、そして私たちに雄弁に語りかけてくれることもありません。しかし、確かな数千年の時間の重みと、それらを使っていた祖先の手の温もりを私たちに伝えてくれるのです。私たちは、こうした祖先の生の証しをできるかぎり損なうことなく後世に伝えていかなくてはならないと思います。

確かに現代の生活には、何千年も以前のことなど何の役に立たないことかもしれません。誰が住んだかもしれない小さな家の跡より、道路ができるで今の生活がより便利になった方がよいかもしれません。しかし、本当にそれでよいのでしょうか。私たちに両親があり、また両親にもその親があるように、私たちの現在の生活が祖先の無数の生の上に成り立っていることを、そして私たちの住むこの地に根を下ろし荒野を切り拓いた先人たちがいたことを忘れてはいけないと思うのです。そのことは、私たちのアイデンティティーそのものであり、私たちは何故ここにいるのか、そして私たちが如何に生きるべきか教えてくれるような気がします。

歴史的風土との共存。これは、「文化」というなんとも漠然としたものを扱っている私たち岡山市教育委員会文化課の理想のひとつです。そのためには文化財を護り、後の世に長く伝えていくとともに、それら文化財の存在や価値を広く市民の皆様に知っていただくことが何より重要だと考えています。専門的で取っ付きにくいかとも思いますが、この報告書がその一助になれば望外の幸いです。

初めて遺跡の発掘現場に立った時、その地面を踏み締めた先人の足の温もりを、土器を持つ先人の手の感触を感じたような気がしました。この感動を忘れず、今後一層文化財の保護に努めるとともに、多くの人とこの喜びを分かち合いたいと考えております。

平成10年3月31日

岡山市教育委員会社会教育部
文化課長 富岡博司

報告書抄録

ふりがな	つくりやまだい4ごうこふん							
書名	造山第4号古墳							
編著者名	安川 満							
編集発行機関	岡山市教育委員会文化課							
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 TEL 086-225-4211							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"	東經 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
つくりやまこふん 造山古墳 せいやまこふん 第四古墳	おかやましんじょうしも 岡山市新庄下 1189-2	市町村 33201	遺跡番号	34° 40' 05"	133° 48' 10"	1991.05.15 1991.05.24	約500m ²	市道新庄下 49号線外2線 拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
造山古墳 第四古墳	古墳	古墳時代	周溝状遺構	円筒埴輪 形象埴輪類	円墳と考えられていたが帆立貝形前方後円墳である可能性が高くなった。			

造山第4号古墳

1998年3月31日

発 行 岡山市教育委員会
岡山市大供一丁目1番1号

製作・編集 岡山市教育委員会文化課

印 刷 山陽ラベルマーキング株式会社